

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十六卷 第十二号 日本幼稚園協会

12



Magase

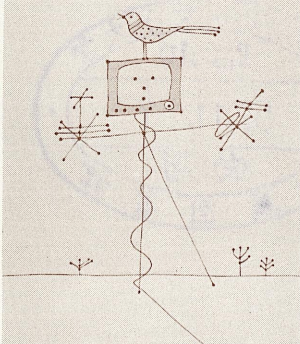
フ レーベル館 の

保 育 図 書

—/放/送/教/育/入/門/—

放送教育入門

全国の幼稚園保育所放送教育研究会編



テレビ・ラジオを保育に生かすために
全国幼稚園保育所放送教育研究会編
A5判 456頁 1,900円 千200円

保育の中で「放送利用」を積極的にすすめることが人間形成の基礎づくりに役立つといわれています。効果的な『放送教育』のための必読書。

—/認/識/を/育/て/る/自/然/の/指/導/—



山内昭道・藤永 保 共著

B5判・〈11月上旬発売予定〉

新しい教育プログラムの案出と実践を通じ、
『自然』のもつ規則性に目を開かせ、生き生きした好奇心を導きだすことの大切さを力説。

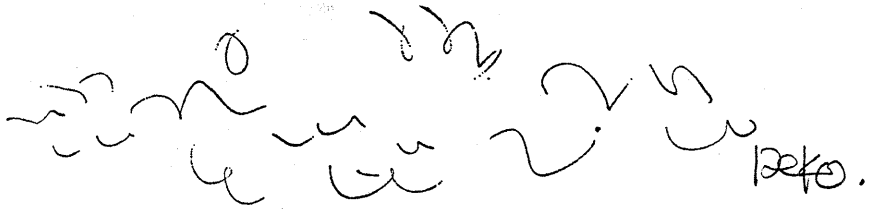
くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課 TEL(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フ レーベル館

幼児の教育

第七十六卷 第十二号





幼児の教育 目次

第七十六卷 十二月号

© 1977
日本幼稚園協会

表紙 永瀬義郎

カット 中島英子

幼児教育第二世紀にむかって

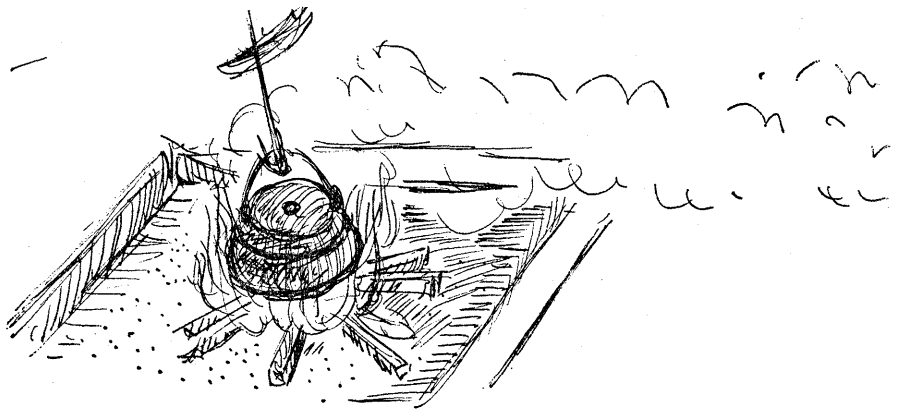
——三つの提言——……………山村 きよ……………(4)

私の幼児教育論(その四)

——幼児の集団と大人——……………佐藤 文子……………(7)

ルーベと星砂……………酒井 恒……………(15)

メガネ……………入江 礼子……………(18)



メガネのもつ力……………	今泉 吉晴……………	(20)
魔法のメガネ……………	八木田宜子……………	(22)
子どもとメガネ雑感……………	金井 崇……………	(24)
ひとりひとりの子どもを見つめて ⑧……………	赤羽美代子……………	(26)
米国の幼児教育における五つの実験 (十五)……………	大戸美也子……………	(28)
アメリカにおけるオープン・エデュケーション (その三)……………	白井 堯子……………	(35)
笑い……………	村田 修子……………	(44)
保育の体験と思索		
——子どもの世界の探究—— (十二)……………	津守 真……………	(46)
史料紹介『桑名日記・柏崎日記』 (その四)……………	松川由紀子……………	(52)
第七十六卷総目録……………		(60)

幼児教育第二世紀にむかつて

—三つの提言—

山 村 ぎ よ



毎月の配本を心待ちにして目を通してゐる私は、十月号で根岸草笛さんの熱意あふれる文章を拝見して、私が常々考えていたことが文字になって嬉しく思っていた時、編集部から依頼をうけてとまどった。「どうにもならない幼稚園の難問題」を四、五枚の紙には書きようがない。けれど、どうしてもこれだけはすぐ手をつけられる、と思う三つのことをなんとしても皆さんにきいていただいた上で、解決の糸口をみつめて努力していただきたいと提言する。

○理論家と、実践家の結びつきをもっと密接に、かたく、快よく近めていただきたい。

昔とちがって多くの大学に保育科ができ、又新しく専門学校としての幼稚園教員養成機関が増したように思うこの頃、地元の、又はながくから幼稚園経営に当っておられる先生方が手を取りあって「本物の幼稚園とは」ということを実践していただきたい。現在もあちこちにこうした研究の集りはあるように思うが、何か、すっきりしないものを感じている。大学の先生方をもっともって利用させていただき、表面だけをさっと通るような研究でなく、もっと日本の子どもを中心にして、子どもの姿を追いかけてみる研究はできないものかと、附属幼稚園をもつ大学の先生方におねがいしたい。お座敷がかからねば幼稚園はのぞかぬの

か？ 現場の先生方が遠ざけているのか？ 個人的な問題をぬきにして現場の先生方に勇気をもっていたらきたい。今から三十年前位にはこうしたことが行われていたように思うが組合にわざわいされるのか？ 形式的ないろいろな問題があるのか？ はた又金銭上の問題？ 誰かが、どこかで勇気をもって解決の糸口をみつけ出してほしい。

○幼稚園長に自覚を持っていたらきたい。

公私立を問わず幼稚園長の辞令を手にしたからには本ものの園長になっていたらきたい。教職員の上に立って、園児のことも、保護者のことも真げんに相手をしていただきたい。「私は子どもことはわからぬから主任に」とおまかせの園長が多いことに驚く、諸外国の幼稚園にはこんな風景は見あたらない。園長の方針は文部省からうけとめた事をしっかりと教職員に実践を通してわからせている「陣頭指揮」は古くさいと思われる方もあるかと思うが、幼稚園の現場は、とくに若い先生方の中には子どもの生活の中にはまりこんでし

まい勝ちであるだけに、園長や教頭が名前ばかりではどうにもならない。経験年数の足りない若い先生方の勤務がながつづきしないのは、いろいろとむずかしい生活上の問題はあるとしても、自分の仕事を園長や教頭に認めてもらえるような、状態ならば何としても三年や五年の勤務はつづけられると思うのに……

成績のよい、やる気充分の卒業生が一、二年で現場を離れてゆく実情を知っているだけに、残念でならない。

○文部省は教員養成機関について最後まで指導し、現職教育を徹底して指導していただきたい。

現在は産みっぱなしのように思われる養成機関がずいぶん多いように思う。教育課程にしても、資格取得にしても、現在のままでは「よい先生」は現場に出てゆかぬと思う。

あちこちで耳にすることは「幼稚園を知っている先生がいない……」幼稚園教師にもいろいろと個人的な問題があると思うが、もっとも現場

教師の利用はできないものだろうか？ 幼稚園の現場に二十年以上もおられた方には、自分の実践してきたことを理論化し後輩の指導に役立つような指導をしてから養成機関に迎えてはくたさらぬのか？ 勿論これには大いに個人的ないろいろな問題がからむこととは思うが何とか「現職教育」の別の方法を考えていただきたい。現在まで行なわれてきた指導者講座には、「出席したくてもさせてもらえぬ人」が多数おられることを考えていただきたい。そんな時にこそ地元の養成機関を利用させてほしい。

紙数に制限があるので三つのことの中でもまだまだ書き足りぬ部分は沢山あるが、私と同じような考えをもっておられる先生方がずいぶん多いと思うので、あととはご推察願いたい。

今年の一月号から読ませていただいた二世紀への提言はほんとうにもっともなことばかり、私のように五十年以上も幼稚園生活をしてきた者には

昔の、恵まれなかった幼稚園生活時代がひとしお懐しさを増す。脚光をあびた現在の幼稚園のいろいろな面での発展、その「発展」は子どもたちにとって幸いなことだろうか？ とつくづく考えさせられるこの頃である。

大変失礼なことばを数多くならべて申訳もございません。でも年よりの「たわごと」とは思わぬようおねがい申し上げます。

(聖徳学園教員養成所)



私の幼児教育論（その四）

— 幼児の集団と大人 —

佐藤文子

子どもを幼稚園に入園させる動機として、「家庭では与えることのできない集団生活の体験をさせるため」と答える親が多いことを前回記しました。幼稚園が幼児の集団生活の場であることは

誰しも認めることでしょう。そうすると同じように小学校は「児童の集団生活の場」としてとらえられるべきでしょうが、小学校はむしろ「勉強するところ」として親にはとらえられているようです。小学校の方はさておいて、幼稚園が幼児の集団生活の場であり、そこでの経験は家庭で与えることができないものであるということを認めて、それでは幼稚園での子どもの集団とはどういうものなのか、そこで子どもは何を経験しているのか等に関心をもち親は意外に少いようです。実際には親は子どもを入園させる

と、幼稚園を便利な子守役として一切おまかせしたり、あるいは「幼稚園で今日は何を習ってきたの」と、文字や数、あるいは歌や遊戯等の目に見えるものの習得に興味をもつようです。

一方保育者の側でも、自分が担任となった組の学級経営に苦心はしても、それを人の一生の発達という展望の下に位置づけないが、今の時期にどんな集団を形成し、どんな経験をさせればよいのか、明確な見通しに立って指導している人は少ないのではないのでしょうか。幼児教育の専門家の中には、早期の集団生活を重視し、乳児期のできるだけ早い時期に集団生活を始めることを主張する人もいます。かと思うと一方ではまた、乳幼児の家庭教育の重要性を説く人もいます。こうした状況の中で、保育者もよほど

しつかりした思想的理論的背景をもたない限り戸惑いを感じ、結局は園の方針等を避け所にしてしまっています。

しかし、学者と言われる人が立派な理論を提出しても、幼児教育に関してはそれが保育者を通して実践されない限り、空理空論に終ってしまふのであり、しかも保育者自身が納得できない理論をもって保育に当たっても、保育者が困惑するばかりでなく、子どもまで混乱してしまふところに、幼児教育の難かしさがあります。幼稚園教育が百年の歴史をもちながら、その方法や内容にあまり変化がないというのも、あるいはこの辺りにその原因があるのかもしれない。

幼稚園教員の養成にかかわっている者として、幼児教育の前進は先ず教員の意識の変革からと考えないわけではありませんが、私は、保育者自身が子どもとかかわる中で、どうすべきか、何が必要かを考え、自分の理論を生み出し、実践していくことが最も大事なことだと考えます。

今回は、私が幼稚園で子どもを観察したり、子どもと接触しながら、幼児の集団に関連して、感じたり、考えたりすることの二、三を述べてみたいと思います。

私は、乳幼児期の集団生活を決して軽視するものではありませんし、幼児が仲間と接触しながらいろいろと学び、成長、発達していくことを否定しません。しかし子どもがとにかくいっしょにいれば、そこに発達にプラスの経験が生ずるという考えには疑問を感じます。大人とのかかわりが全くない乳幼児集団というのは、現実にはありえないので、子どもだけの集団の中で子どもがどのように発達するのかわかり得ないのですが、私の推測では、子どもだけの集団というものは力関係の支配する厳しい世界だと思えます。従って私は、子どもだけの集団を過大評価することに危険を感じます。大人と直接の接触はなくても、大人の世界の価値と秩序が子どもの世界に入り込むことによって、子どもの世界に秩序ができるのであって、むしろ重要なのは大人の世界に通用している価値と秩序がどういうものかを問うことです。誤解のないように申しそえますが、私は決して大人の価値や秩序を子どもに押しつけることを主張するものではありません。

子どもの世界が力関係の支配する世界だということについて、私の観察例を二つばかり、次に述べてみます。

(一) 幼稚園三歳児、十一月末、みんなでチューリップの球根を花壇に植えた後、担任の先生が一寸の間その場を離れた。すると

子どもたち六、七人がすべり台のついたジャングルジムに登り始めた。E子がすべり台の頂上近く登った時、下からM子が登ってくるのを見て、「M子ちゃん私がすべってからにして、順番なんだから」とM子が登るのを制している。ところがそのすきにM夫が右側のジャングルジムからすべり台の上に登り、すべり出したら、E子はだまってそれを見ている。M夫はすべり終ると再びすばやく横から登ってもう一度すべる。こうしてM夫が二度、三度すべるのをM子はだまって見ている。

この時期の女の子は、全般に、運動面の発達では男の子より遅れており、ジャングルジムを下から真直ぐ登ることはできても、M夫のように横から斜めから自由に登ることは難かしいのです。それにM夫はクラスでもボスというほどではないが一目おかれている子です。

三歳児もこの頃には仲間に入りたい時は「入れて」と言うし、順番も守ることはできるのですが、担任の先生の姿の見えない子どもだけの世界でM夫は力にまかせて横から入ろうとするし、M夫が自分より強いことを認めているE子はM夫のそのような行動を見越すが、自分より力が弱いと感ずるM子には順番を守ることを要求します。

私は、こうしたE子やM夫の行動を見ながら教師の存在を改めて考えさせられました。E子やM夫は、教室では先生に強制されるから規則を守るが、先生の見ていないところでは規則を無視すると解釈するのは、あまりにも大人の側の見方でしょう。私は教師が規則を教えるというより、教師が秩序の代表者としてそこにいる時に、子どもの世界に社会秩序が育っていくのだと思うのです。と同時にその秩序が子どもの中に本当に生きて機能するためには、場面場面での緻密な指導が必要とされます。それについては、次の例も合せて考えてみたいと思います。

(二) 五歳児、七月、お天気が良く組全員が園庭で遊んでいる。K夫は体も小さく、全般に幼い感じの子で、日頃も集団の遊びに入るより一人遊びが多い。この日も元気のよい男の子が五、六人群をなして園庭の遊具を、あちこち移って遊んでいる。K夫は一人すべり台で遊んでいたが、先の子どもの群が「たか鬼」をすることに決めてポートぶらんこを離れると、K夫はぶらんこに近づいて乗ろうとする。すると先の子たちが戻ってきて、「あ、Kちゃんのっちゃだめ」という。K夫は一瞬たじろぎ、乗るのを止める。私がお子に「どうしてKちゃんのっちゃいけないの」ときくと「どうしても」と答える。「『どうしても』ってどういうこ

と」ととききかえすがだまっている。その間K夫はぶらんこの端の方で後ろ向きになって黙っている。今度はK夫に「Kちゃんのりたいんでしょ。どうして入れてもらわないの」ときくと、K夫は振り向いて小さい声で「のせて」というが相手の子たちは聞こえないふり。その時、別の男の子が遠くから「仲間に入れて」と走ってくる。そうすると例の子どもたちは「いいよ」と言って乗せてやる。その時、しばらくの間姿が見えなかった先生が現われ、組全体で別の活動に入ったため、私の介入もそこで終った。

このような光景は幼稚園にお馴染みの方には殊更珍らしいものではないでしょう。強い子たちが去った後ぶらんこに乗ろうとするK夫、それを見て「Kちゃんだめ」と制する子、だまって引き下がるK夫、ここで子ども同士の交渉は終わります。「どうして」と問えば、「どうしても」という答、しかしこれでは一歩も前進していません。勿論、こういう場面に会った先生方はそれぞれに指導を試みられていることと思います。

私は、丁度その頃、ある目的からいくつかの幼稚園で発達検査をしていました。子どもと検査場面で接触しながら、幼児のこと

ばの発達と自己表現についていろいろと考えさせられました。数概念や抽象能力は発達しており、そして知識としての語いは豊富でありながら、自由に自分を表現することが求められる場面では口を閉ざしてしまふ子、逆に自分の言いたいことは自由に話すのが、概念化、抽象化が難かしい子………子どもの反応は一人一人違いながら、何人かの子どもに接していると、幼稚園毎の特徴と呼びたいようなものが感じられて、それぞれの園の指導を思い浮かべてみました。

ことばの発達は子ども同士の知的発達と密接に関連しているため、多くの親は子どものことばの発達について非常に敏感です。正しく発音できるか、どの位単語を知っているか、文章の構成はどうか、あるいは文字をどの位読めるか書けるか等に親は非常な関心をもちます。そしてこれらは確かに言語発達についてのある程度の目安となります。しかし幼児期のことばの発達をこの側面からだけとらえるのは不十分です。先に挙げた概念化、抽象化の能力は知的発達の指標であり、言語発達と密接に関係しています。そしてそれは私たちが周囲の世界を知るその仕方に関わってきます。このようにことばの発達は知的発達と密接に関係しています。ことばの発達を子ども的人格面と切り離して知的面からのみとらえることは理論的に可能であっても、子どもの教育という点

からは問題を感じます。

ことばには大きく分けて、コミュニケーションの手段としての機能と思考の用具としての機能という二つのはたらきがあります。この二つの機能が幼児期においてどのように関連し合っているのかということに関しては議論のあるところで、ここではその詳細にふれる余裕はありませんが、研究者の中にはコミュニケーションの手段としての機能は、子どもが人と接触する機会さえあれば自然に発達するが、思考の用具としての機能の方はそうはいかないので、幼児期の言語教育は後者、すなわち思考の用具としてのことばのはたらきの面を育てる方にむけられるべきだと主張する人もいます。私も概念化や抽象化の能力、思考の用具としてのことばのはたらきが成熟に伴って自然に発達するとは考えませんが、しかし前者、コミュニケーションの手段としてののはたらきえには賛成できません。勿論、ある程度までは発達するでしょうが、望ましい対人関係、集団を発展させるようなコミュニケーションができるようになるためには、どうしても幼児期の指導が大切だと思います。更に、コミュニケーション、思考、いずれにしても、それが個人において有効にはたらくためには、個人の自我の発達に支えられていなければなりません。そのことを考える

と、私は幼児期には自己表現の力を伸ばす指導が大切であり、これが、結局はコミュニケーション、思考両者の発達に連なるものと考えます。

このことについて、先の例に戻ってもう少し説明を加えたいと思います。私が自己表現というのは、第二の例について言えば、「どうしても」を明確に表現させることです。大人の場合、理由ははっきりしているが表明したくない場合、「どうしても」と誤魔化しますし、また言語的にうまく表現できなくて面倒な時、「どうしても」と言ってしまうことがあります。子どもも五歳位になると、理由は明白でも言いたくないので、「どうしても」を使う場合もありますが、大抵は何となく感じているが、きかれるとどう言っているかわからない、それで「どうしても」、「わからない」と答えることが多いようです。しかしこれは単に表現技術の問題ではありませんし、また知的に発達すればはつきり言えるようになるとは限りません。「どうしても」を繰り返していたのでは、対人状況が進展しないばかりでなく、子どもの自我それ自体の発達が停滞してしまいます。

自分の行動のよって立つその漠然とした理由を言語的に表現す

ることによって、自分自身そうだったのかと納得したり、それに對する相手の反応を見ることによって、自分の理由づけが正しかったのかどうか確認もできます。そして、そうした相互過程において、ことの重大さに気づいたり、逆にたいしたことでないとかかったり……自分自身の心の動きが自分にはっきりしてくると同時に、相手の気持もよりよく理解できるようになります。理由がはっきりしている場合でも「どうしても」と誤魔化しているうちに、次第に自分自身も相手もわからなくなってしまう。

これは仲間に入れてもらえなかった方についても同様で、ただ引き下がるだけでは全く進展しません。勇気を出して「入れて」と言ってみても「いや」と言われればそれきりになります。しかし五歳児になればもう一歩進んで「どうして入れてもらえないのか」を確かめさせることが必要でしょう。この点については、恐らく幼稚園の先生方も指導しておられることと思います。しかしこのような自己表現——自分の気持を言語化し、自分自身に、そして相手に伝える——は繰り返しますが決して単なる表現技術の問題ではないし、また単に仲間はずれのない仲良し集団を作るための手段にすぎないものではありません。それは自分自身を知り、他の人を知るといふ、子どもの自我の発達に基本的に重要なことにかかわっています。そしてそれは子ども同士が接触してい

れば自ら育つものではありません。そのような自己表現の力を育てるためには、子ども同士の相互交渉と同時に大人の援助を必要とします。「援助」ということは誤解を招きそうなので、以下少し協道にそれて、カウンセリングのことにふれながら、私の用いる「援助」の意味を説明しておきたいと思えます。

カウンセリングにもいろいろな立場があります。カウンセラーが来談者の悩みをきいて助言や指示を与える、これも一つの立場であり、このような方法が有効な場合もあるでしょう。しかし一つ一つの問題の解決ではなく、問題をもつ私自身が変化する、そのためにはカウンセリングを通して私自身の自我が再体制化されなければなりません。自我の再体制化などと言うとおおげさに聞こえますが、大切なことは、私の身体と心の全てが私に語りかけてくることに耳を傾け、自分自身を受入れていくことです。刻々に移りゆく生命の流れの中に自分自身をおき、流れのままに動いていく、そして刻々に移りゆく体験過程を言語化する、それが的確になされた時、自我体制が少しずつ変化していきます。しかし言語的にとらえた体験過程はすでに過去のものであり、私はまた今の体験に耳を傾けなければなりません。そのようにして、刻々

に新しい自分に出会い、新しい自分に成って、いくのです。この過程はまた自分自身に真実になっていく過程でもあります。このような過程において、問題は刻々に新しい視野の中に見えてきます。

勿論、このような変化は容易になされ得るのではなく、ここにカウンセラーの援助が必要となります。しかし援助と言っても、先ずカウンセラー自身が自分に真実で、自分の体験過程に敏感であり、自分自身を受入れているということが条件であり、その上に立って来談者の体験過程に敏感に素直に応ずることができるということが要求されるのです。来談者自身受け入れられずにいる体験や感情を、カウンセラーが的確に言語的に表現することによって、来談者は自分自身に出会い、自分自身を受入れることができるようになります。このようなカウンセリングの過程で、カウンセラーと来談者の間に刻々に新しい状況が生れ、来談者だけでなくカウンセラーも変えられていきます。それはまさに出会いであり、生成 (Becoming) の過程です。このようなカウンセリングについての研究は、人間が基本的に関係において存在するものであることを教えてくれます。

私が先に「大人の援助が必要」と言ったのはこのような意味の「援助」の必要を述べたのです。子どもたちの「どうしても」を

「どうしても」で終らせない援助が教師からなされる時、K夫と他の子どもたちの間に新しい状況が展開するでしょう。K夫は自分の行動が他の子たちにどう受けとめられているかに気づくかもしれないし、いっしょに遊びたい時にはどうすればよいかを知りたがるかもしれない。他の子どもたちは、その時のK夫の反応から、それまで知らなかったK夫の姿に気づくかもしれない。……こうしてK夫と他の子どもたちの間の交渉が進展する中で、K夫も他の子どもも成長していきます。

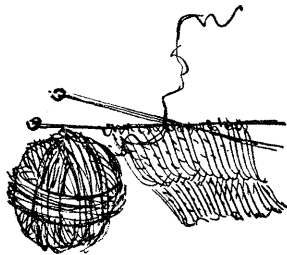
これまで述べたことはどちらかというと、コミュニケーションの発達、社会性の発達に関わるものと考えられるかもしれませんが、です。けど幼児期にあつて自分の気持ちを正しく表現するために、正しい発音、適切なことば、正しい文章構成等を学んでいかなければならないことは言うまでもありません。カウンセリングなどの場面では表情その他状況の手がかりを媒介として相互の交渉が展開していきますし、対人関係の仕事に従事する場合には、そのような状況の手がかりを敏感に用いることも必要でしょう。しかし私は望ましいコミュニケーションを展開させるためには、先ず自分や環境について正しい認知とその適切な表現が必要であ

り、そのための指導は思考の用具としてのことばの指導と密接に
関わってくると思うのですが、この問題に深く入ることは紙面の
都合上、また今回のテーマからも控えることにします。

子どもの「どうしても」を「どうしても」で終らせない援助を
するためには、大人自身、自分と他人に真実に自己表現できるこ
とが要求されます。そして子どもの刻々の心の動きに敏感に対応
しながら、子どもと出会い、大人自身変えられていきます。その
ような大人と共にいる時、そこには外側から強制されていっしょ
にいる集団ではなく、互いに真実に、開かれた仲間集団が育つ
のではないのでしょうか。

|| 終り ||

(秋田大学)



ルーペと星砂

酒井 恒

ルーペ (Lupе) という言葉はドイツ語ですが虫目鏡とか拡大鏡というような言葉よりも語呂もいいし、何となく科学的なひびきもあるせいか一般に使われています。

私は昭和三十四年の春に日本教育テレビ、NETが開局された時、理科番組で「ルーペの下に」というタイトルで、しかし一六〇回程放送を続けたことがあります。自然の観察とすることは理科教育の基礎でそのためには肉眼での観察とともに気づいているいろいろな題材を使って放送したのでした。略傍の一草一木といえども、また一匹の昆虫のからだの構造にも肉眼的な特徴とならんで、ルーペで拡大してはじめて見えてくるいろいろなしくみがあるもので、そのような観察によって自然に対する興味が一層増してくるものと思われまふ。大きすぎてよくわからないから縮小してみるという観察法は聞いたことはありませんし、そのような眼鏡もありません

が、小さいために見落したり見誤ったりしている例はとても多いようです。私はどこへいくにもポケットからルーペを手離したことはありません。

この夏にも私は南沖繩の石垣島・竹富島へ珊瑚礁の動物研究にいってきましたが孫たちへのおみやげは竹富島の星砂でした。竹富島の南側には星砂の浜と呼ばれる、クリーム色の砂浜があります。この浜では砂に見えるのは殆んどすべてが有孔虫の殻です。有孔虫というのは海の原生動物でアミーバの仲間ですが、普通のアミーバとちがって、からだの中に石灰質の殻もっています。その殻にはいろいろな形のものがあります。星砂の浜ではほとんどすべてが星の形になっています。この浜は天然記念物に指定されていて、砂をとることは禁止されていますが、島のまわりにはほかにも立派な星砂がたくさん見られます。

私はもち帰った星砂を黒い羅紗紙の上にはらまいて、それ

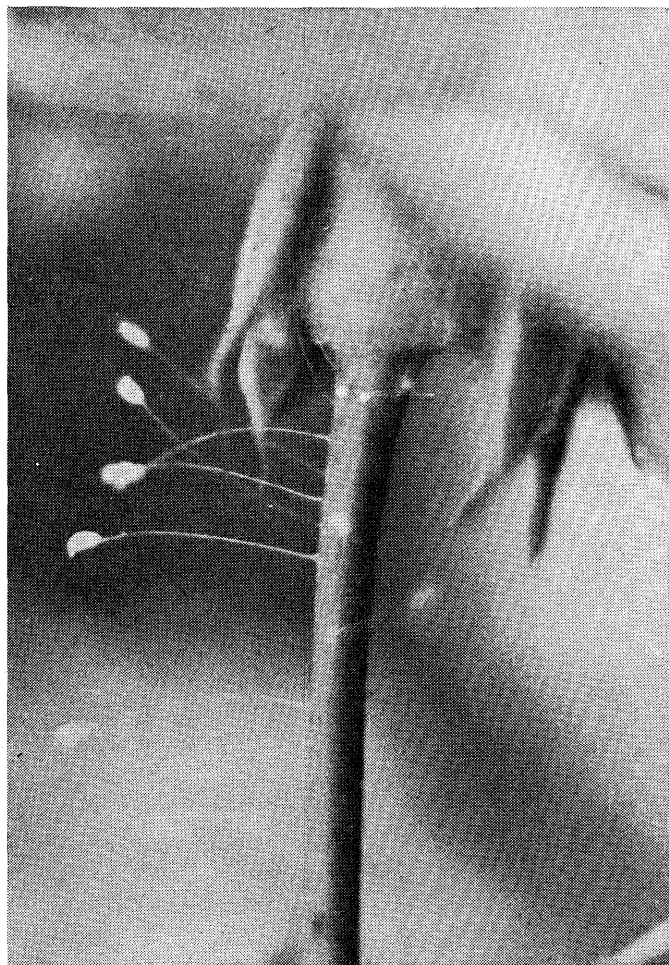
をルーペで見ることを孫に教えました。孫はいま五歳で鎌倉の長谷幼稚園の園児ですが、五放射、六放射、四放射といろいろある有孔虫の区別を教えますと、すぐに要領を覚えて、これは五つ星、これは六つ星、これは四つ星とおどろくべき早さで星砂を分類してよるこんでいました。そして星形以外の有孔虫をも区別してより分けましたが、肉眼では区別のつかない砂粒大の有孔虫でも、幼稚園児がルーペを使って観察できるということは私にとって驚きでありました。

私は以前に、ある幼稚園協会の集まりで、先生方に対して幼稚園児にルーペを携帯させることを提案したことがありましたが、今日でもこの考えは変わっていません。大形のレンズでは日光で焦点を結んで危険を伴うことがありますが、小形の折り畳みのルーペでは何の危険もありません。

家庭にあつても野外ににかけても、ルーペ一つで私共の気のつかない自然界の小さいしくみに気がつくことがたくさんあります。私の近所ではこの頃幼稚園児が大ぜいいて、孫のところへ来て遊んでいます。時折私もいっしょになって遊びます。先日もみんなで手を出し合つて指紋が巻いてるか、流れてるかルーペを使つてくらべっこをさせましたところが、とても熱心に指くらべをしていました。

料理に使つた魚の鱗。イカの足についでる疣ぼこの中にある黄金色の王冠など或いはお母さん方もお気づきでないかもしれませんがルーペで拡大してみるととても美しい形態です。庭に咲いているアカマンマも、オミナエシも、一つ一つの小花を拡大してみるとちがった美しさがあらわれてきます。一匹のトンボでもカブトムシでもそのひげや目玉や口つきをルーペで拡大してみると全くちがった昆虫の素顔が見られます。写真は一輪のバラについたウドンゲをルーペで見たところです。ウドンゲとは昆虫のクサカゲロウの卵がかえつたあとの殻のことです。

わが国には大きい光学器械の会社がたくさんあつて立派なカメラや顕微鏡がつくられています。どこの会社からも、ルーペというような品物はつくられていません。多分単価が安いのでそのような品物は、もうけが少なく、問題にされないのでだと思います。ドイツではツァイスの会社からすばらしく明るくてきれいのよいレンズのついた「No. 8」「No. 8」と銘のはいつたルーペを売り出しています。性能がすぐれているばかりでなく、アクセサリとしても使える位です。うらやましいことです。



バラに生みつけられたクサカゲロウの卵：ウドンゲ

メガネ

入江 礼子

保育中にメガネをかけていることは、なんともはや鬱陶しい。動きが激しいので、すぐにずり落ち、鼻メガネになるし、夏は汗が吹き出し、暑くてたまらない。ところが、テキパキと動き回るには邪魔なメガネも、ふと思いがけないことで、子どもたちとの絆を結ぶきっかけになることがある。ここでは私が今までに体験した例を一、二挙げてみようと思う。

まずK君とのこと。私が初めて自閉的な傾向を持つ子どもたちも受け入れている幼稚園に実習に行った時、なんと目もあまり合わないといわれている彼がジーンと私の顔を見るのである。私は何が何やらよくわからなかったが、ともかく目を合わせてくれること自体が嬉しくて、彼が好きなピョンピョンはね（体をピョンピョンはねさせて踊ることをいっしょにやったり、砂をサラサラ落したり、穴に砂を入れたりして遊んだ。以後、週に一度行く度に、必ずジーンと私の目をみてくれるのである。私は目が合わないなんて何かの間違

いではないかと思った。そして相変らずピョンピョンはねなどをいっしょにしていた。

ある日のこと、いつものように彼は私が行くとジーンと私の目を見る。丁度その時である。風で舞った砂ぼこりが私の目の中に入ってしまった、痛いのでメガネをはずすと、何とK君の視線も、私の手に持ったメガネの動きにつれて動くではないか。おかしいと思い、メガネを右に左に移動させると、やはりK君の目はそれを追っているのである。つまり今まで私がK君の視線が合っていたと思っていたのは、大きな間違いだったのである。K君は私のメガネに映る自分の顔や、まわりの景色を、まるでテレビの画面に見入るがごとくに見ていたのである。私はそれに気付いた時、かなりがっかりした。しかし、幸いなことに、誤解がきっかけになったとはいえず、その時には既に私もK君と他のことでも遊べるようになっていた。つまり気づかぬうちに、メガネがきっかけとなってレポートが成立していたのである。このことは、今ま

で鬱陶しいだけだったメガネも保育の中ではヒョーンなことから役に立つことを知らせてくれたわけである。

もう一つ、T子ちゃんのこと。彼女とは、愛育研究所の家庭指導グループで知り合った。入園当初、彼女はともかく隅っこへ行ってしまうか、人に背を向けてお人形さんなどと遊んでいた。私は何とか彼女と結びつきを持ちたいと思い、つかず離れず彼女の様子を見守っていた。彼女はあまり自分から体を動かすのは得意ではない。しかし大人にグルグル回しをやらせてもらうのは大好きらしいことがわかり、以後しつこいくらいに抱き上げてはグルグル回しをしていた。抱っこをすると、彼女と視線の高さが同じになる。ところが同じになっても最初のうちは、ほとんどこちらの方に見向きもしてくれなかった。しかし、私がずり落ちかけたメガネをよいしょと元の位置に戻した時、急に彼女はメガネの存在に気づいたのか、一時、それに見入った。(この頃の私は、もう子どもたちが目を見てくれているのか、メガネをみているのか区別がつくようになっていた。つまりそれほどメガネに興味を示す子どもが多いのである)そして私の目からメガネをはずし、なんと彼女自身の目にかけてやうとするのである。それも

上・下逆にかけるのである。しばらくして、私に返してくれ、まがりなりにも私の顔にかけてくれるのである。それを何回も繰り返す。以後グルグル回しのあとは、しばらくメガネのやりとりをして遊ぶことが続いた。

何か月経つたらうか。ある時突然、彼女はメガネのやりとりをしつつ、ニコニコと、とってもいい顔で笑ったのである。この頃は、メガネ遊びだけでなく、メガネという道具を使わなくても大人と二人で、倒しっこ(ボンと押しでは倒れるギッタンパソコンのような遊び)のような遊びが出来るようになっていった。そんなふうに一人遊びのみではなくて、相手といっしょに遊べるようになるキッカケを、偶然メガネは果たしてくれたのである。

このようにメガネは対人関係が出来あがる前段階のキッカケの役割を果たしてくれることが多いのである。

仕方がない、これだけ多くのメリットをもたらしてくれるメガネである。これからも、多少鬱陶しくとも、醜くなるうとも、保育中は仲良く鼻の上に住まわせねばるまい。

メガネのもっ力

今泉吉晴

メガネをかけて遊ぶ遊びは、かなり高度な精神的基盤を前提とする遊びなのではないでしょうか。その面白さには、大きく分けて、二つあるように思えます。まず第一に、メガネを通して見る世界の楽しさをあげることが出来ます。その楽しさは、ふだん見ている世界とのずれの面白さにはかなりません。この場合、メガネを通して見る世界が、ある意味でニセの世界であることを知っていなければ、楽しみも出てこないことでしょう。動物はこれを認識できません。ヒヨコやカメレオンにメガネをかけさせ、食物をついばむ行動がどう変化するか、という実験が行われています。彼らは、メガネをかけて見ている世界が、ふだんの世界とずれていることを認識できず、けんとうちがいの方向をつつき続け、すっかり狼狽してしまいます。メガネを楽しむどころではないのです。

メガネをかける第二の面白さは、見られる面白さ、つまり変装の効果にあります。人間にとって顔は表情の中心ですが、目はさらにその中心です。メガネは目を大きく変化させ

るので、かける操作が簡単なわりに、最高の変身効果を持つ方法といえるでしょう。残念ながら動物はこの楽しみも、知らないようです。だが、遊びとしてではなく、実用としてでなら、動物も相手に与える目の効果を大いに利用しています。ここでは、その意味での目の性質を知る中から、メガネの持つ力について、考えてみることにしましょう。

そもそも動物にとってなぜ目が（見られる目が）重要な意味を持つのか、という問題があります。それはおそらく、彼らのふだんの生活の中で相手にじっと見られるという状況は二つしかなく、そのいずれもが重大な状況だからです。すなわち、敵がじっと自分を見る目、そして、母親がじっと自分を見る目の二つです。もちろんその意味は正反対です。前者は、ねらいを定め攻撃に移ろうという前の凝視ですから、敵意の象徴です。後者は世話をし、保護するための凝視ですから愛情の象徴だといえます。いずれもじっと見るという行為には、相手をよく調べるという第一義的な意味があるわけで

す。調べられる側からは、それは自分に敵意がふりかかるか、あるいは愛情か、のどちらかであるというのが原則です。

しかも愛情の象徴としての凝視が行われる時と場は、きわめて限定されています。それは、母子の間か、ペアーを組む雌雄の間にかまざるありません。したがって、動物にとつて凝視は一般に、敵意の象徴とみる方が、安全かつ適応的なのです。これが、多くの動物がじつと見られると生得的な警戒反応を示す理由だと思われまふ。ネコは人間にじつと見られると、目をそらし、あらゆる方向を見るか、あるいは怒りはじめまふ。サルは劣位者は、優位者を見ようとしません。見ると敵意を持つとみなされ、反撃されるからです。

ところで、凝視する二つの目は、大きく見開かれ、動きません。動物は、まるい黒い円が横に二つ並んでいるのを見ると、それに対して、凝視されたのと、同じ反応を示すのです。この反応を利用したのが、例えばガの翅にある目玉模様です。多くのガは左右の後翅に一個ずつ、大きなまるい斑紋を持っています。木の幹にとまっているガは、翅をたたみ、前翅で後翅をかくしています。そして、鳥などがおそってく

ると、翅をひらき、目玉模様を示すのです。鳥は突然出現した大きな目におどろき、一瞬ちゅうちょします。そしてガを逃がしてしまうこともある、というわけです。

私たち人間も目に対して、同様な反応を示すことがあるようです。満員電車にゆられる人たちは、全員目を窓の外に向けています。それは景色を見るためというより、お互い相手の目をさげていることの結果であるようです。濃いサングラスは威嚇の効果を持ちまふ。それは下にかくされた目が不気味だということもありますが、基本的にはサングラスそのものが、大きな動かない黒い目として機能しているからです。

子どもが、メガネをかけて遊ぶのを好むのは、一つには、相手に与えるメガネの効果に気をよくするためであると同時に、自分自身がちがってくる楽しみにあるものと思われまふ。赤ん坊はこの種の変身を理解できません。動物同様、恐怖や恐れなどのなまの反応を示してしまひまふ。変身を虚構として理解し、その中に遊びの世界をつくり上げる子どもたちの能力は、実に高度なものと言わなければなりません。

(動物学者)

魔法のメガネ

八木田 宜子

「魔法のめがね」というタイトルの童話があるような気がしていいです。そこで、家じゅうの本棚をかきまわしてみました。そういうタイトルの本も、そういうタイトルの童話ののった本も、見つかりません。同業者の親友に電話をしてみました。「どうも読んだみたいだけど、作者名も、内容も、はつきりおぼえていない」という返事。

そのうちに、はっと気がつきました。「魔法のめがね」なんてタイトルは、あまり平凡すぎて、だからなのじゃないかな。あるかもしれないけど。

めがねには、もともと、魔法的な性格があるのです。だから、「魔法のめがね」なんて話は、書こうと思えば、いくらでも安易に書いてしまいます。それではおもしろくない。

リチャード・ヒューズの「クモの宮殿」という短篇集の中に、小さなガラスのかけらをのぞいてみたら、人間が人形に、人形が人間に見えて……という、ゆかいな話が入って

ますが、書く側としては、例えばそんなふうにも、変化をつけたくなるでしょう。

さて、めがねはなぜ魔法的か——。大学時代の友人に、ものすごくふ厚いめがねをかけた男の子がおり、彼がいつかこう言ったのを、今でも忘れられません。

「おれねえ、小学校の高学年のとき、はじめてめがねをつけてもらって、かけたんだけどさあ、あんなびっくりしたことってなかった。それまで、灰色だと思ってたまわりが、ものすごく明るくて、いろんな色があるんだものね」

私たちは、子どものめがねどころではない時代に育ちました。ようやくめがねをつくってもらうまで、彼は日常、たいへんな不便をしいられたことでしょう。でも、自分が他人と違うと思いつつ、その世界をあたりまえのようにも思っていたとき、はじめてめがねをかけて感じたおどろきは、本当に、どんなだったでしょう。

目のわるい者にとって、かけると世界が一変するめがねは、まさに魔法的ではありませんか。視力矯正用のめがねは、なくてもいいのです。私たちにとっても、外界を見る窓は目しかないのですから、その目にめがねをかければ、外界は違

って見えます。

たとえば、お祭りなどで、オモチャの色めがねをよく売っていますが、あれをかけて、まっかな世界や、青い世界をのぞく幼児たちは、めがねの魔法を楽しんでいるのです。

また話が「魔法のめがね」にもどりますが、考えようと思えば、あらゆる種類の「魔法のめがね」が考えられますね。

色や形をかえてしまうめがねだけでなく、本当のことが見えるめがねとか、未来のことが見えるめがね、レントゲンみたくに人間の骨格まで見えてしまうめがねなど、きりがありません。

思い出しました。魔法のめがね。いえ、めがねに魔法をかける魔法つかい。故平塚武二氏の敗戦直後の作品「ウィザード博士」では、ウィザード博士という魔法つかいが、王さまのめがねをふいてあげると、めがねをかけなおした王さまは、何もかもが、まっかに見えるようになってしまっていました。

でも、この話と、オペレッタ「ホフマン物語」の中で詩人ホフマンがかかるめがね（人形が人間に見えるめがねで、ホフマンは、美しい人形を人間と思いこんで恋してしまう）く

らしいか、物語の中の魔法っぽいめがねは思い出しません。やはり、めがねは、よほど工夫をこらさないと、安易な小道具になってしまうからでしょう。

さて、今まで、もっぱら、めがねとおして外界を見る立場から、めがねが魔法的だと申ししてきましたが、めがねそのものの形態が果す役割にも、魔法的などころがあるように思えます。

目は心の窓、といいますが、目は人間の顔の中でいちばん目立つところです。濃いサングラスをかけただけで、もう、すっかりその人の感じが変わってしまいます。サングラスは、紫外線よけ、という目的のほか、変装用や、アクセサリーとして、つかわれますね。また、仮装舞踏会用のめがね、博多にわかなどの仮面……。しかし、外観をかえるためのめがね、またはめがね的なものは、同時に、かけている者に自己暗示をかける役割も果しているのではないのでしょうか。

いずれにしても魔法的なもの、それが、めがね。私自身も、常時めがねの魔法のお世話になっている人間です。

あ、「魔法のめがね」という本ですが、けっきょく、見つけられませんでした。
(童話作家)

子どもとメガネ雑感

金井 崇

眼鏡店には色々な目的をもった御子様方が御来店になります。大別してみますと、家族の方のメガネの御用の御供としてついて来られる場合と御本人が装用もしくはこれから装用しようとしての場合と二通りあります。一般的にみますと、前者の場合は比較的陽気に振舞い、メガネ枠やサングラスを玩具の一種のようにみなしているように思われます。「ママ、それカッコいいよ!」とか「バンドみたい!」などとすぐれた批評家になることもあります。ところが傍観者でなくて自分自身が装用者である場合には、多分に態度が違ってまいります。メガネ本来の役割は医療用具の一種で、眼の屈折異常の矯正を目的とするものなのですが、この本来の使命を本能的にキャッチしてメガネに対して、ある種の恐れを抱くのでしょうか、或いはこのメガネをかけた自分を見て、友達は何て言うだろうかなどと幼ない心を痛めて気が重くなる為でしょうか、後者の場合は比較的神秘的態度でメガネに相對しま

す。

約三年程前のことですが、当時六歳の女の子が母親に連れられて来店され、テレビを見る時、画面に近づけばかりでなく、画面に対して真正面に向わずに斜めに向き、そして横目づかいで画像を見ているということで相談に來られました。早速検査してみますと強度の乱視が検出されましたが、何分にも年齢が低いので即断を避け、幸いなことに私の弟が眼科医であるので、弟に精密検査を依頼しましたところ、同様の結果を得ましたので、そこで初めてメガネを作りました。でき上ったメガネをかけて物がよく見えると喜んで帰宅されましたが、一か月とたたないうちに再び来店され、そのメガネをかけて幼稚園に行くとお友達から「メガネザル」と言われてひやかされるので幼稚園にかけて行くのは絶対に嫌だというので、何か他によい方法はないだろうかと相談されました。そこで再び弟と相談の結果コンタクトレンズ装用にふみきり、その御子様はそれ以来現在に至るまでずっとコンタクトレンズを使用されております。このようなケースはしばしば耳にしておりますが、このお子様の場合は御母様が眼に対する理解度が大きかったので最上の方法で解決することがで

きましたが、一般的にみまして、我が子にメガネをかけさせることを躊躇なさる親御さんが大変多いように見受けられます。特にそのお子様が女子である場合はその気持が強くなるようです。眼科の先生方の御話では近視も遠視も乱視も皆眼病の一つだと言われます。するとメガネはその特効薬と言えましょう。頭が痛いとかお腹が痛いと言えば、すぐに病院に飛んで行かれますが、どういうわけでしょうか、物がよく見えないと御子様が悪えても、できればメガネはかけさせたくない願う親御さんが多いのは誠に残念です。

田宮虎彦氏は『愛するということ』という著書の中で、若い女の人の中には眼鏡をかけることを嫌がる人がいる。色々なカラーの眼鏡枠それ自体は美しいアクセサリーとさえ言える程なのに、それをかけるとその人の顔の美しさが消えてしまふのだろうか。もしたとえそのために美しさが消えるにしても、物がはっきり見えるならば眼鏡はかけなければならぬいだらうと言っています。見えない眼で物を見るのと、メガネをかけてはつきり物を見るのとどちらがよいかは自明の理です。この雑誌をお読みになれるのは教育にたずさわれる方々ばかりと思いますが、この誌上をお借りして御願ひした

いことは、早いうちに屈折異常の御子様を発見して、その御子様のハンディキャップをできる限り早く取り除くようにしてあげて頂きたいことです。つい先頃のNHKテレビで帝京大学医学部の丸尾教授が「子供と遠視」という演題で御話になっておりましたが、御両親、学校の先生への御願ひとして、

一、テレビ、本を近くで見る子

二、細かい仕事、勉強に根気がない子

以上二つの点に気がついたらすぐ専門の医師に相談して精密検査を受けるようにと警告されておられました。すでに十分御配慮なされておられることでしょうが、是非これらの点に御留意頂き御子様方の視生活にも目を向けて頂きたく重ねて御願ひ申し上げます。

最後に最近店頭で伺ったある御母様の言葉を御紹介して終りにさせて頂きます。小学校一年生と二年生の男児御二人を連れてその兄弟のメガネを求めに來られた方ですが、でき上ったメガネを兄弟にかけさせて、「このメガネはお前達目なんだから大切にしなさい」とおっしゃいました。

(眼鏡店経営)

ひとりひとりの子どもを見つめて⑧

赤羽美代子

或る日、我が園の、日ごろの保育の流れの中で、流れを中断して始まる、昼食の時間帯を考えてみました。

六月も半ばになると、新入園児も園に慣れて、園内は大分、落ち着きを見せてくれます。午前中、たっぷり遊ぶ子。又、お弁当になる頃から、遊びが始まる子。と、さまざまです。

教師が「そろそろ、お食事ですよ」と知らせる声に「あー、お腹がすいた」と、自覚する子。又、「もう、片付けるの？」と、遊びに心を残す子。ともかく、昼食に入る時間はどの子どもも、遊びとの関わりが、容赦なく中断される。子どもたちは、教師側の、一方的な、リズムの流れに追われる如くに、片付ける・手を洗う・お弁当の準備へと、どの子どもも、一様に流されて行く。次には、全員集合をして、声を揃えて「いただきますーす」と、食事が始まる。あまりにも能率よく訓練された状態である。

保育の流れを、ブツリと留めてから始められる、この食事前のひととき、子どもたちと片付けをしながら、私の心の中を、味けない、一すじの『透き間風』が、横ぎっていく。なぜか、子どもたちにとって、この上ない楽しいお弁当が、小さなお腹を満たしてくれる『餌』の時間のように思われてくる。

食事が『恵みの時』として、保育の流れの中で整えていかれないだろうか。子どもひとり、ひとりが、自発的に行動できる、保育の流れを考えたい。

久しき前から、私は心の中で幾つかの『夢』を生み、育てた。その、貧しく、乏しい『夢』が、ああか、こうかと、「枯れ野を駆け巡る」のである。

(意識の中で、風呂式包みにしておいた一つの『夢』を、披露させていただきます)

まず、子ども用の「食堂」(食堂専用)が、せひ、欲しい。天井の一部は、ガラス張りで食堂内は明るく、清潔です。カーテンで飾った窓辺には、花と緑を絶やさない。子ども用サイズのテーブルには、可愛らしい花模様のテーブル掛け。或る日は、ちょっと、きどって純白。テーブルの上には、その日のデザート、又は、香の物が四人分、お皿に盛ってある。

食堂が開く時間は、決まっている。食堂の入口には、お知らせの札が下がります。

(黄色の札も同じ食堂が開きます)

(緑色の札もどうぞ、お入り下さい)

(赤色の札も同じ食堂が開きます)

子どもたちは、その、カラー札の色を見ながら、片付けを始めたり、友だちを誘ったりして、お弁当を持参して、食堂に行く。子どもたちも、時間帯に慣れてくると「〇ちゃん、片付けて食堂に行かない?」「今ね、食堂は混んでいるよ。もう少し遊ぼうよ」なんて、会話が聞こえてきそう。

食堂内は、食堂の規則を守らなければならない。

(大きな声で、お話をしない)

(静かに、歩く)

準備された、テーブル上のデザート、又は、香の物は、自分たちで、分かち合う。四人用のテーブルに、三人で着席した時は、後から来るお友だちの為に、残して上げましょう。

おや、まだ、遊んでいる子には、お友だちや、先生が「食堂に、赤色の札が、下がりますよ」と、助言をし、自主的な行動を促す。「僕、早く食べられるから、大丈夫だもん」なんて、

ちゃっかりと、時間の計算済みの子どもも、いるでしょうね。三歳児のちびちゃんが、いっしょのテーブルに着いた時、「お茶をついであげましょうね」と、年長児の、積極的な行動と、会話が、出そうな気がする。

以上が、私の貧しい「夢」の骨組みです。

先に記しましたように、我が園でも、建物の関係上、教師の合図で、一斉に片付けをし、保育室が、急ごしらえの食堂になります。先生方は、くふうを重ねて、楽しい雰囲気をつくり、配慮します。

しかし、これで良いのではなく、一方的に流されるこの時間が、子どもたちの、自主的な行動として、積極的に動けるよう、設備を整えていきたいものです。

しかし「夢」から醒めてみると、現実はいくつと、手足を引っこめずに、現状の中から出発して、限られている時間に追われつつ、子ども、ひとり、ひとり、お腹を満たす時間として流されぬよう、教師も、子どもたちも、思いきって、イメージの世界を広げてみては、いかがでしょうか。

そして、先生方、子どもたちの「夢」が、園いっばいに、駆け巡っては、いかがでしょう。(靈南坂幼稚園)

米国の幼児教育における五つの実験（十五）

大 戸 美 也 子

はじめに

これまで一九六〇年代のなかばからこの十年間に、米国の子どもたちのために政府あるいは現場教師が試みてきた教育、および福祉をめぐる運動の主なものを紹介してきた。政府主導ですすめられた教育（保育）と福祉を統合するための運動は、ヘッド・スタートにはじまり、フォロー・スルー、デイ・ケアへと発展していくなかで、次の三つの問題の解決に当たってきた。

- ① 幼児教育を中流の子どもたちからすべての子どもたちものへ拡大する。
- ② 幼児教育が仲介して、上（小学校教育）と下（三歳未満児の保育）への一貫性をはかる。
- ③ 多様なプログラムを開発する。

また、現場の教師が主導してきた学習形態の改善運動は、オーブン・エデュケーションと教育（保育）過程の新しい動きに代表され、次の三つの問題に目下挑戦している。

- ① 子どもの学習にかかわる多面的な情報源の開発
- ② 子どもと情報源との多様で可変的な関係⇨学習スタイルの究明

③ 個々の学習スタイルに即した教師の援助の仕方⇨効果的な教師行動の探究

前者は、教育実践の条件の改善を推進したのに対して、後者は教育実践の展開そのものの改善をもたらしつつある。いいかえれば、前者は教育対象、期間、カリキュラムの「拡張」等、量的な改善に貢献し、後者は教育の質の向上に貢献している、ということもできよう。幼児教育の発展には「量・質」両面の改善が必要であるが、この十年間の米国における幼児教育をめぐる改革運動は、まず量の改善にはじまり、質の向上に向かったことにひとつの特徴があるように思われる。何故、教育・保育改革が量の改善から始まり、何故、それが質的な改善を重視する方向に転換していったのか？ この問題を明らかにするためには、教育改革運動

をつつんでいた当時の米国の政治的、社会的状況、そしてそれらと教育界との関係に目を向ける必要がある。

一、何故、教育対象、期間、プログラムの拡大から教育改革がすすめられたか。

米国の幼児教育は長いこと他の教育機関から比較的独立し「静かなよどみ」(Cohan & Rudolph, 1977) の中で、その独自の教育・保育活動を展開してきた。それが、一九六〇年代に入ると、教育史の中でも「幼児教育の時代」(Layzell, 1970) と特記される時代が到来し、幼児期は「学習のための決定的な時期」(a crucial year for learning) であるとして、その存在もとり重要性までにわかかに認められ、社会改革の先兵として活躍することが期待されるようになった。幼児教育は、教育界の末席に連なるのでさえ、百余年もかかったことを考えると、この時期に特別の働きかけが外部からかかったことは容易に想像できる。この十年間に幼児教育をとりまく米国社会の状況そして教育界に果せられた主な課題について検討してみよう。

一九五〇年代おわりの米国　一九五〇年代は、アイゼンハワー大統領、ダレス外交の時代で、米ソが核の保有量によって「恐怖の均衡」を保つ、いわゆる冷戦の時代であった。冷戦下の米国民の緊張状態、そしてこの緊張状態を破ったスプートニック

・ショックの衝撃の程度について、まず教育学者のヴァン・チル(1974)に証言してもらおう。

「……(一九五〇年代なかばの米国は)ソ連との冷戦が最も冷えこんだ時代であった。一九七三年六月、ソ連の指導者ブレジネフが訪米したときに見られた親しみ深い関係は、五十年代には想像もつかないことであった。国民は、米国の科学と技術力がロシアと対等にあることに恐れをつのらせていた。科学と数学における訓練されたマン・バックの必要がさげばれていた。」

一九五七年、ソ連のスプートニックの打ちあげと同時に、米社会のヒステリーは亢進し、学校は格付の生けにえとされてしまった。雑誌「ライフ」は、学校のカーニバルの中止をさげび、知識人は、卒業後一度も小学校や中学校を訪れたこともないのに、学問的な厳しさに欠けるとして学校を声高に非難しはじめた……」(Van Til, 1974, p. 2-3)

スプートニック一号が地球の周囲を廻る軌道にのった直後、全国放送を通して行なった大統領の呼びかけは教育界への圧力を一層強めた。

「……ソ連は今や、科学者と技術者とを合わせてみた場合、合衆国以上の人員を擁している。しかもソ連では、これらの分野の大学卒業者が、合衆国よりずっと急速に出てきつつある。」

実践・特性

	教育実践(範囲と方法)			教育の特性	
	教育の範囲	子ども重視	子ども・課題重視		課題重視
カリキュラム改革時代					二極化 効率性 実証性
補償教育時代		フォロースルー	ヘッド・スタート		実験化 多様性 可変性
学習形式改革時代				<ul style="list-style-type: none"> ○ブランド・ヴァリエーション ○インフォーマル・エデュケーション, オープン・スクール ○教育過程の研究 	共有化 相対性 個別性

米国の教育政策・

	教育の背景		教育政策
	世界の政治・文化	米国の政治・社会	方法案・プログラム
1957	10. ソ連スプートニク打ちあげ	1. アイゼンハウアー第二次政権発足 9. 最初の市民権成立	11. 大統領によるカリキュラム改革の提唱
1958			国防教育法
1959	2. カストロ政権発足 9. ソ連 月面到着		9. ウッズ・ホール会議開催 ブルーナ「教育の過程」
1960	5. ソ連 米のU2機撃墜		
1961	4. ソ連 有人ロケット(ガガーリン乗員)打ちあげ	1. ケネディ政権発足	} 認知発達研究時代 ハント・ブルーム
1962	米ソ宇宙競争激化(～65)	10. キューバの海上封鎖	
1963		8. ワシントン大行進 11. ケネディ暗殺	
		ジョンソン大統領就任	
1964	8. トンキン湾で米と北ヴェトナム交戦	8. 「経済機会法」成立	
1965	2. 北爆開始	1. 「偉大な社会」作り貧乏との戦い宣言	4. 初等・中等教育法 6. ヘッド・スタート開始
1966		ヴェトナム反戦運動拡がる	11. 児童発達に関する行動計画の検討
1967	1. 英 プロードン報告書刊行	都市での黒人暴動頻発	フォロー・スルー, 母子センター開始
1968	5. バリ五月革命 ヴェトナム和平交渉開始	4. キング牧師暗殺 6. R・ケネディ暗殺	3. H・Sの評価研究開始公立学校批判広まる
1969		1. ニクソン政権発足	4. H・Sは児童発達局へ, ブランド・ヴァリエーション開始, H・Sの評価でる 8. ディ・ケアに関する政策抗争はじまる(～71.12)
1970	4. カンボジア侵攻	5. ケント州立大生射殺 6. ウォーター・ゲート事件発覚	シルバーマン「教育の危機」
1971	1. ヴェトナム和平協定調印	1. ニクソン第二次政権発足	フォロー・スルーの評価

……われわれは科学者を必要とする。今後十年間に、現在計画しているより数千人以上の科学者が必要だ。

現在は全国教育週間である。……私が望むことは、各教育委員会、および各PTAが、今週および今年に次の一つの計画を特別事項とすることである。その計画とは、各自の学校の教育課程と水準が、これからの時代のきびしい要求にこたえるものであるかいなかを検討することである」。

この演説のあと、当時の非常事態をいみじくも反映した「国防教育法」(一九六八)が制定され、指導的な物理学者、数学者、生物学者を動員して意欲的なカリキュラム開発を促進する。さらに翌年には、自然科学教育改革運動を再検討するために、有名なウッズ・ホール会議が召集され、「どのような教科も、その意味を変えることなくあらゆる段階の子どもに教授できる方法——つまり、構造しないしは論理を内合している」(Bruner, 1960)。という教育改革の命題を確認するに至るのである。今では知らぬ人となないブルーナーのこの著名な仮説は、実際には実証困難であったことをブルーナー自身はっきりと認めたが、(Bruner, 1971) 当時においては「他の考え方をのみこみ、適切な方法の試行を阻止するようなイデオロギーの働かさえをもっていた」(Van Til, 1974) のである。

一九五〇年代のおわりには、米国の国際的立場が、国内政策に教育政策の決定に直接大きな影響を与えたことが伺える。幼児教育も教育界の末席にあって、以上のような時代の影響の下で、

「教授の基本的構造」が究明され、それらを効率よく構成して構造化されたカリキュラム作りが展開する一方で、伝統的な未構造化な幼児教育のカリキュラム批判をはじめるのである。また、同じ頃、国内のできごととして最初の公民権法(一九六七)が制定され、ここにも教育介入の場所が作られるが、当時キューバの革命政権の樹立、ソ連領での米のU2機の撃墜など、相次ぐ米ソの緊張状態に、教育界の関心は自ずと国外の方に向けられたといえる。

一九六〇年はじめの米国 ケネディ大統領は、前政権より冷戦と公民権運動の二つを受け継ぐが、一九六二年六月、ソ連に和解をよびかけ、ワシントンとモスクワ間に直通電話ホット・ラインを結び、さらに部分的核実験停止条約の締結にこぎつく。こうなると米ソ間の緊張は一挙に解消し、両国間の戦争の危機は遠のくと同時に、教育界にのしかかっていた圧力が軽減していくのであった。一方、公民権運動は交通および教育機関の差別撤廃運動を通して全米に広まり、少数者の教育要求の声が日増しに高まる。これまでの教育改革はすでに教育を享受している人々を対象に、特定の職業人の多量生産をめざしてすすめられてきたもので

あることに、人々は改めて気づいていく。また、この時期に次第に明らかになってきた、各種のカリキュラムの効力の限界あるいは、知的な能力の階層差の研究結果も、教育者の関心を国内問題に変えていく作用をもたらしたといえることができる。

一九六〇年代なかばの米国 国際関係の緊張緩和と市民権運

動の拡大という二つの遺産を受けついだジョンソン大統領は、その政治的優先権を国内問題に移していくという見通しは歴史の経過から明らかなことである。大統領は、「貧乏との戦い」という闘争を宣言し、貧乏をばく減するために教育、特に幼児教育を意図的に活用するヘッド・スタートをはじめとするプロジェクトを發展させ、補償教育の時代に入るのである。

教育課題の変遷過程を、国際的、国内的な文脈の中でとらえ直してみると、カリキュラム改善運動も補償教育も、教育界の發展的な課題として教師によってもたらされたというより、国・内外で展開した政治的ゲームに勝つための施策として生まれてきたことは明らかである。ゲームに勝つためには、攻撃の対象 (target) を決め、どの位の期間、どのような戦略 (strategies) によってせめていくかをばくきりさせていかなければならない。この論理にそって教育改革をすすめていくなら、改革の指標として教育の「対象」と「時期」と「プログラム開発」がとりあげられ、

改革の成果をこれらの拡大という量の変化でみていく傾向を強めたのも当然であったといわねばならない。

二、何故、教育の質的な改善を重視することで教育改革をすすめることになったか。

方向転換の理由として、二つのことが考えられる。一つは、教育改革の推進者の役割交代、もう一つは教育改革自体の內的發展の結果とである。

カリキュラム改革は、米ソ間の雪どけによって用済みとなった。補償教育は、ヴェトナム戦争という新たな国際紛争に国内の戦争中「貧乏との戦い」を譲らなければならないという事態により縮小された。政府が教育界から手をひけば、現場教師がこれまで教室内でコツコツと展開してきた事でもその関係の改善という教育の質にかかわる問題が浮上してくる訳である。

また、ヘッド・スタートからはじめられた補償教育の展開は、やがてブランド・ヴァリエイション (本誌四月号参照) という教育プログラムの多様性を保障するシステムを生み出した。ブランド・ヴァリエイションの実施結果、子どもたちの状態によってプログラムの効力にちがいのあることが見い出され、標準カリキュラムから公教育を解放したのであった。このような動きは、公教育の

中でさまざまなプログラムの共存を可能にし、また個々の子どもの興味とその変動に即してすすめるオープン・エデュケーションの導入を促したといえる。プログラム改革、補償教育の展開の過程で、プログラムの質、学校外の諸経験、そして教師のあり方のすべてが、教育内の子ども行動にかかわっていることが明らかにされ、教師の主體的な教育状況への参加をさそい、結果的に教育の質の改革をすすめる結果を導いた。

三、米国の幼児教育の特性

この十年間の米国における幼児教育改革の展開の仕方から、最近の米国の幼児教育の特徴というようなものをいくつかとらえることができる。それらを列記すると次のようである。

- ① 教育は、国家の内外的の問題に対応する手段として、しばしば利用される傾向がある。幼児教育も例外ではない。
- ② その場合、教育が「勝利」の万能薬のように宣言され、教育開発、研究プログラムのために多額の予算がおりる。その結果、一定のテーマに基づく研究がにわかに、多様で、多量に生産され、教育界に一種の流行を生じさせる。
- ③ 政府の施策の変更は、予測なしにおこなわれるが、政権交代のときは必ずおこなわれる。従って、教育のプロジェクト

の生命は一般に短かく、プロジェクトの効果をその短期間の実施で結着づける傾向がある。

④ どのような教育改革も、多様な形で展開されるので、教育改革の実態を一般化することはむずかしい。

⑤ 米国の教育改善は、政治的、社会的に適応しながらすすんでいるが、米国社会が複雑なため、改革がすすんでもすすんでも新たな問題に直面し、全体的な教育水準の向上がおくれの傾向である。 ■おわり■

文献

- Cohen, D. and Rudolph, M. Kindergarten and early schooling
New Jersey: Prentice Hall, 1977.
- Lavatelli, C. Introduction, In E. Evans, Contemporary influences of early childhood education. New York: Holt, 1975.
- Van Tii, W. Curriculum quest for relevance 2nd Ed. Boston, Mass.: Houghton Mifflin, 1974.
- Brunner, J. The process of education, Boston, Mass.: Harvard University Press 1960.
- Brunner, J. The process of education revisited, Phi Delta Kappan, Sep. 1971, 18-21.

アメリカにおけるオーブン・エデュケーション（その三）

白井堯子

PTA活動・地域社会と

学校のつながり

十月、十一月号において、オーブン・スベイスの学校建築、I・G・E (Individually Guided Education 個別指導教育)、それに伴うティーム・ティーチング制、無学年制などを特徴とするグリア小学校の内容を記したが、そういう特色ある教育を支えているPTAのことについても簡単に触れてみたいと思う。

アメリカで生活していると、ああ日本と違うなあ、と思うことが沢山あるが、その一つはアメリカ人の強いコミュニティ・スピ

リットである。しょっちゅう引越しているにもかかわらず、彼らは常に自分の出身州を誇り、自分が現在住んでいる地域を大事にする。大事にするとは、その地域の自然や施設を利用するだけでなく、逆にその地域の改善に自分が貢献することだ。その端的な現われが労働力提供、つまり奉仕活動である。

地域社会で最も重要なものの一つはもちろん小学校だから、小学校は遠慮なく親に奉仕を求める。親は都合が悪ければ断わればよいので、ことは簡単だ。たとえば丁度暇な時に電話で学校に呼び出された私の夫は、大きな木の箱にペンキを塗ってくれと

いわれてびっくり仰天、アメリカ人と違ってペンキ塗りの習慣がないので、靴までペンキだらけにして大奮闘し、「アメリカに来てペンキを塗られるとは思わなかった」と苦笑いしていた。しかし、その間、先生や生徒とワイワイ話をし、学校の備品と同じペンキを手にはベタベタつけて、この学校との連帯感を文字通り肌身で感じたというから面白い。

奉仕といえは、とても印象的であったのは学校の校庭づくりである。グリア小学校は郊外の森を切り開いてつくったので、校舎はできても広い庭には何も設備がない。そこで古タイヤ、古自転車、煉瓦、丸太

棒、タイル、木箱、その他何でもよいから不要なガラクタを供出してほしいという手紙が校長先生から届いた。広い庭にこういうガラクタが集められると、次に近くのヴァージニア大学の建築科の大学院生たちがやってきて、この材料を使い、これも奉仕で子どもの遊び場を設計し、あっという間に芸術的な遊び場をつくってしまった。親はガラクタの処分ができたし、大学院生は設計の練習をして創作欲を満足させ、子どもたちは先輩の設計に大満足でタイヤのトンネルやブランコなどで楽しく遊ぶのだ。日本ならば会社に発注しそれだけ税金が高くなるところだが、税金の節約ぶりは、誠に見事なものである。

日本のPTAはわが子の教育問題、受験問題、そして親の親睦などがその主体のようだが、アメリカでは地域社会の教育のためにPTAがある。だから、子どものいない人までが小学校に奉仕する。小学校に

は、クリスマスやヴァレンタイン・デーのパーティー、遠足など色々な行事があるが、大抵、手のあいている母親に応援が求められ、母親は大勢の子どもたちのためにクッキーやケーキを焼いたり、ジュースをつくらして学校に届け、パーティーを手伝う。親の奉仕は授業にまで及び、前回の英語の授業のやり方とところで触れたように、われわれは先生の指示でスペリングを覚えるためのゲーム教材をつくったし、日本なら大問題になるであろうが、簡単なテストの採点まで手伝うのだ。

親の授業参加

地域社会の子どもたちの教育は学校の先生だけではなく地域の大人全体の責任なので、親がしばしば学校に行って直接教育にたずさわるといふ発想は日本にはあまりないのではなからうか。I・G・Eは

特に人手を要する教育法だから親の参加は常に歓迎される。「センター」の助手をしたり、子どもたちのワークブックの勉強を手伝ったりするだけでなく、何か特別の能力を持った親は、その能力を積極的に提供する。ギターが上手で歌の得意な母親は、音楽の時間に時々皆に歌を教える。そして子どもたちは、「今日はジョンのお母さんが歌を教えてくれたのよ」とてもきれいな声だった」と大喜びするのだ。私が授業参観をした時には、黒人の女の子が「繰り上りのある足し算の計算がわからないからそばにいて教えて」とやってきて、にわか先生にさせられてしまった。親の授業参加は先生の授業法を乱すこともあるが、そのマイナスよりも、友だちのお母さんから授業を受けるといふ新鮮な刺激が大きなプラスを生むようだ。

そこでいよいよ私にお鉢がまわってきた。何しろ学校の授業は伸縮自在だから、



◀写真1
私と娘から折紙を習う先生たち

ある時期にユニットA全員のために一週間に渡って日本特集のプログラムが組まれた。どうやら、そろそろ帰国しなければならぬ晶子との別れを記念してくださるらしい。日本の映画が上映され、日本の地理、歴史、生活について簡単な授業が行われ、最後にわれわれ夫婦に何か日本のことを説明せよとの依頼である。こうなったら断わるわけにはいかない。夫や他の日本人の人と相談して日本的な品物をかき集め、先ず私が折紙を実演し、アメリカ人は不器用だから「つる」などではなく「ピアノ」など簡単な物の折り方を教えた。この時晶子は大得意で、私の助手として机の間を廻って皆に教えて歩いていた。

折紙の次に夫が筆と墨を使って日本の字を説明。あまり関心はないだろうと思ったら大違いで、仮名だけでなく簡単な漢字の書き方までやらされ、大わらわであった。そして最後は、色々な品物を示して日本に



◀写真2
日本についての授業で着物の紹介

ついで話をし、晶子を使って、子どもたちが最も興味を持っている着物の着付け実演をした。彼らは、映画とは違う迫真力(?)に満足したようで、沢山の質問を浴びせてきた。

親が授業をする子どもも嬉しいうたが、それは親にもこの上ない良い経験である。つまり、自分の子どもを大勢の中の一入として客観視できるからだ。そして家中では気づかない色々な点を知ることできる。小学校に一年ちょっといただけで全く英語に不自由せずのびのびと振舞う晶子の姿に、今さらながら驚いたものだ。また、毛色の変った子どもにもこんなに仲良くしてくれたユニットAの百人の暖かい友情に、ふと胸にこみあげるものを感じたのである。私の話を真剣に聞いてくれた子どもたちは、白い子どもも黒い子どもも、わが子と同じように皆可愛い。授業の後で子どもたちは沢山のお礼のお手紙をくれた。

それらは今でも大事にとってあるが、アメリカの子どもたちとの触れ合いは本当になつかしい。

親はこのように学校に対して大いに奉仕をするけれども、同時に、自分たちの税金で支えている公立の学校のやり方を、その税金が有効に使われているかどうかという観点から発言をしていくという傾向も多く見られ、これはとても印象的であった。アメリカのハイウェイを走っていると建設中の道で、「あなたの払った税金はここで有効に使われています」という意味の看板をよく見かけるが、この税金の使途に対する敏感な意識はPTAの集りでも大いに発揮されている。

あなたの学校

そのPTAの会合はいつも夜行われた。これは仕事をしている母親の多いアメリカ

では当然のことなのであろうし、父親の参加者も多かった。こういった会合で校長先生がいつも強調なさったのは、「この学校はあなた方が所有しているあなた方の学校だ」ということであった。だから自分の家庭のようにいつでも自由に学校に来て気がついたことはどんどん述べてほしいし、より良い学校をつくっていくことを荷なってもらいたいというのだ。そして校長先生自身の親に対する接し方も、ずい分日本とは違っているように思えた。校長先生は、いつも学校の校舎の入口に一番近い部屋にいらっしゃる。だから何か用があって学校へ行くときと真先に出でいらっしゃるのは、校長先生なのだ。日本のように校長先生は建物の奥の方にいらして、お会いするためには何人もの手を経なければならぬとは大違いである。あれでは、気安く話をしようなどという気が起らないのは当然ではなからうか。また日本では責任者に手紙を出して

も返事がこないことがよくあるが、責任者がすぐ返事してくれるのもやはりデモクラシーの国アメリカである。今回この体験記を終えるにあたって、最近の情報を知るために久しぶりに校長先生に問い合わせの手紙を出したところ、グリア小学校長は私たちがいた頃と同じマーシャル先生で、部厚い資料と共に次のような回答を送ってくださった。

校長先生の手紙

私はあなたがI・G・Eに関心をお持ちになり、I・G・Eについてもっと学びたいと思っていच्छることを、お手紙で知り喜んでいきます。あなたのお嬢さんのアキコさんがグリア小学校に在学中には、楽しい経験をなさったということが大変うれしく思います。あなたに三冊のI・G・Eについての出版物をお送りします。それら

の本をお読みになればあなたの御質問はわかり頂けるでしょうし、I・G・Eのプロセスについて、もっとはつきり御理解頂けると思います。

あなたの出された五つの御質問は、これらの出版物をお読み頂くことでおわかり頂けると思いますが、私のI・G・E教育における個人的な経験をもとにしてあなたの御質問にお答えしましょう。

①「グリア小学校で行われているようなI・G・Eはアメリカでどの程度普及しているか？」グリア小学校で行っているようなI・G・Eはアメリカの教育の典型的なものでも標準的なものでもありません。I・G・E教育は、全米で約十五パーセントから二十パーセントの学校によって推進されているだけです。

②「グリア小学校で、I・G・Eは期待し

たような成果をあげているか？」グリア小学校では、現時点においてI・G・Eは私の期待したように進められています。しかしながら、われわれの仕事は決して完成したわけではありません。われわれは、絶えず子どもたちの求めているものに適合するよう技術の改善を試みています。

③「I・G・Eの長所と短所は何か？」I・G・Eの最大の長所の一つは、教師がチームをつくり、それぞれの子どもたちのためにより良い方法手段を発見するということだと思えます。子どももまた、複数の先生といっしょに勉強していく機会を持つことができます。I・G・Eについて私が考える唯一の短所は、I・G・Eそれ自体が行っている短所ではなくて、I・G・Eを持っている人間が持っている短所だと思います。もしも教師たちが、I・G・Eをどういう順序でやるかということにだけ頭

が向いて、I・G・E自体をどう発展させるかという努力をしないならばI・G・Eは失敗に終るでしょう。

④〔I・G・Eは小学校以外にも適すると思うか?〕現在のところ、I・G・Eは五歳から十二歳までの子どもたちに推奨されています。しかし今や、沢山の中学校がI・G・Eを始めています。それは、主に、子どもたちが小学校において受けたI・G・Eに親が満足したことによります。親は子どもが中学校に進学すると、中学校においても同じようなプログラムを続けてほしいと中学校に圧力をかけ始めています。

⑤〔オープン・エデュケーションはアメリカで減少傾向にあると聞いているが……〕あなたがおっしゃる通りオープンエデュケーションがアメリカで減少傾向を示していることは事実だと思います。しかし、オー

ブン・エデュケーションとI・G・Eとを混同しないで下さい。両者の間には相違があると私は思うからです。I・G・Eは先生の一つの現場訓練のプログラムでもあります。それに対してオープン・エデュケーションとは、子どもたちが何でもできるようにオープン・スペースを持った学校を建築することだともいえましょう。あるいは、子どもたちが何でも好きなことをやることだともいえましょう。しかし、I・G・Eではプログラムがつくられており、子どもは学習において一種の詰め込み教育を受けることもありえます。アメリカでは新しい校舎を建てる時、オープン・スペースにする傾向がありました。普通、新校舎は旧校舎の跡に建てられます。私の考えでは、オープン・スクールのいくつかが失敗した理由は、普通、旧校舎時代の教師をそのまま、新校舎に移すからだと思います。彼らの多くはオープン・スペースの学校で

教えるという希望を持っていません。彼らは非常に戸惑いを感じ、また大抵の場合、オープン・スペースに移る前に殆ど訓練や教育を受けることができませんでした。私はもし教師たちが不愉快な状況の中に置かれていれば、何をやるにせよ失敗するのは当然だと思えます。

このグリア小学校を開校する時には、私は教師を募集する機会を得ました。私は六十八人の先生に面接をし、二十二人を選びました。私は、偏見のない人、熱心に働くとうとする人、オープン・スペースで仕事をしたい人、ティーム・ティーチング制度のもとで仕事をしたい人、子どもにとって学習経験をチャレンジングで実りあるものにするためにできることは何でもやりたいと思っている人を、探しました。

私があなたにお送りする出版物があなた

のお役に立てることを願っています。さらに何かお役に立てることがあれば、御遠慮なくおっしゃって下さい。グリア小学校でどうやってI・G・Eを行っているか、アメリカの、あるいは他の国の教育におけるI・G・Eの大きな可能性についてお話しするのを大きな喜びとしています。鍵は教師です。もし教師が献身的で、喜んで仕事をし、喜んで学んでいくのならばI・G・Eは成功するでしょうし、学校の運営もまたうまくいくでしょう。

フルトン・W・マーシャル・ジュニア

I・G・Eとは何か

マーシャル校長先生が送ってくださった本は、『I・G・E実施のためのガイド』『I・G・Eとは?』『学校のプログラムの改善』の三冊である。これらの本はいずれもチャールズ・F・ケテリング財団に支え

られている教育開発研究所 (Institute for Development of Educational Activities = IDEA) から出版されたものである。IDEAは、一九六五年に設立され、I・G・Eを目的とする学校改造を援助しており、アメリカの教育改革運動に大きな影響力を持っているようだ。この本を読むとI・G・Eの方法もその効果を高めるために、絶えず発展していることがわかる。マーシャル校長先生の手紙に、I・G・Eとオープン・エデュケーションを混同しないようにとあったが、オープン・エデュケーションはかなり広い概念で、物理的にオープン・スペースの校舎を使う場合や、子どもによる学習の自主選択など、さまざまなものを含むようである。I・G・Eはグリア小学校のようにオープン・スペースで行われる場合が多いし、無学年制、チーム・ティーチング制などを採用していくのだから、オープン・エデュケーションの一種と考え

てよいであろう。現に稲垣忠彦氏は『アメリカ教育通信』(評論社、一九七七年)の中でアメリカのオープン・エデュケーションを典型的に四つに分け、その二番目としてI・G・Eをあげている。(二〇四頁)

I・G・Eは教育法であって、子ども一人一人にとって必要な教育を与えるためにさまざまな工夫をこらしたものである。それは多様な子どものための計画的な教育プログラム、個別的な学習スタイルに適した教材、大グループ、小グループ、一対一授業、独習などを有機的に組み合わせた教育法、一人一人の生徒に適した教師の配置などから、無学年別、チーム・ティーチングなど、グリア小学校の例に見られるような実に豊富な内容を含む。これは、人種的にも文化的にも多種多様なアメリカの子どもたちにとっては、確かに有効な方法だといえるであろう。

帰国後、日本の教育に接しI・G・Eと

I・G・Eのサイクル

『I・G・Eとは?』より

評価

ジョニイは何を学んだか。

$$\frac{1}{4} + \frac{1}{4} = \frac{2}{4}$$

$$\frac{2}{3} + \frac{1}{3} = \frac{3}{3}$$

$$\frac{1}{4} + \frac{1}{2} = \frac{2}{6}$$

$$\frac{1}{3} + \frac{5}{6} = \frac{6}{6}$$

目標

ジョニイは何を学ぶ必要があるか。

分母の異なる分数の計算の能力を示しなさい。

再評価

ジョニイは彼の目標に達したか。

$$\frac{2}{8} + \frac{2}{4} = \frac{3}{4}$$

$$\frac{2}{3} + \frac{4}{6} = \frac{8}{6}$$

$$\frac{3}{8} + \frac{1}{4} = \frac{5}{8}$$

学習プログラム

いかにしてジョニイをその目標に到達させるか。

ジョニイは小グループにいる時に勉強効果をあげる。彼は道具を使うのが好きだ。彼はスミス先生によく反応する。

それ故にジョニイを分母の異なる分数計算を不得意とする他の5人の子どもとグループングする。スミス先生が、台所計量器具を使ってその勉強を助ける。

比較すると、その長所は一段と明らかに
 なる。日本の教育は本当に画的で、とにかく
 百科辞典のような教科書をつぎつぎと詰
 め込むのだ。そして、どんどん落ちこぼれ
 を生み出していく。この落ちこぼれという
 大問題は、I・G・Eで救うことができる
 し、そうすれば、家庭教師をつけたり塾に
 行かせたりする必要はなくなるであろう。
 暇のある母親が、もし親のエゴイズムでな
 くコミュニティ・スピリットを持ちうるな
 らば、学校へ行って教師を助けることも可
 能であろう。

しかし、今の日本の現実の中では、そし
 ていわゆる西洋的な個人主義を身につけて
 いない日本人には、この制度を一般化する
 ことは不可能だと思われる。その理由は、
 第一に日本はアメリカのように異質な人間
 の集合でなく同質社会なので、個別教育の
 必要性がアメリカほど強くないこと、第二
 に日本の学校は現在非常に競争社会であっ

て、能力別編成は親の一喜一憂を生み、甚しい弊害をもたらすこと、第三に一人のリーダーを中心にしたティーム・ティーチング制は、日本では教師の間に反撥を招くこと、第四にオープン・スペースの学校を建築することは困難であり、教師の教や教育費に限界があること、第五に教育過程がアメリカのように柔軟ではないので、能力に応じた教育は時にはかえって子どもに不利益をもたらすことなどがある。

晶子がI・G・Eによってどんな利益を得たのか、これを具体的に計測することは難しい。個別指導によって英語の力がめきめきついたことは確かだし、オープン・スペースの部屋に置かれた豊かな教材を使って、自分が疑問に思うことを自分の力で、しかも、まめに動いて調べる習慣も身についたようだ。また、小人数教育だから、先生の話の聞いたり、ワークブックをやる時によく集中する癖もついたような気がする。

る。だが、大勢の友だちの中で、自分を観察して自己を発見したり、刺激を得たりする機会が乏しかったのではないだろうかとも考える。けれども何よりもしあわせだったことは、彼女がグリア小学校が大好きであったことだ。彼女にとっては、学ぶことは楽しいことだった。人と競争するのではなく自分のペースで学んでいけたこと、わからないことは何度もわかるまで教えて頂けたこと、先生方がいつも受容的に接してくださったこと……。色々な要素が重なりあって彼女に学ぶことの楽しさを教えてくれた。楽しかった授業の思い出は、何年も時を経てから結晶し、子どもの意欲となる。彼女はいう。「ヒューリー先生の音楽の時間にベートーヴェンとモーツァルトのことを習ったわ。でも、どんなことを習ったのかは全然覚えていない。先生がベートーヴェンとモーツァルトの曲をピアノで弾いてくださって、とてもきれいだったノベ

ートーヴェンってどんな人？ 伝記を読んでみようつと……。」

マーシャル校長先生に資料を頂いたお礼状を出す時、私はこのことを書き添えたいと思っている。

（慶応大学）
|| おわり ||



笑 い



村 田 修 子

「手を叩きましょ、……笑いましょ、あっはっは」などと笑い声を取り入れた子どもの歌はたくさんあります。満一歳になった孫が「幸せなら手を叩こう」という歌の「手を叩こう」の部分をいろいろにかえて歌ったところが、けらけら、と笑って大喜びの反応を示したのはやはり笑いでした。

或る芸術家が「幼児にとってよい先生の条件の一つは、きれいな色のセーターを着てにこにこすることです」といわれたのを聞いたことがあります。本当にその通りで、広い意味でいえば先生も環境の一つといえます。

けれどもその「笑い」にもいろいろあります。涙が出るほどおかしくて、純粹に笑いこぼる、という場面は大人だけの世界では余りありませんが、幼稚園ではよく

ぶつかることです。それは多分子どもの反応が、こうなるだろう、と大人が考えた方程式通りではなく、彼等独特の型にはまらない創造的表現によるものでしょう。

以前のことですが実習にきた学生が三歳児を指導したとき、成りゆき上計画にないまま、ねことねずみの鬼あそびを始めたとき、ねことねずみになった子どもは、友だちの作っている輪の回りを、あたかもその遊びをしているように走っていました。それは追ったり追われたりしているのではなく、それぞれがただ走っているだけなので、ときにはねことねずみが真正面に向き合っただけを合わせてしまいます。「あらっ、」と思っていると互いにこりと笑ってくるりと反対向きになって又走り出すなど、この光景を見ているものは抱腹絶倒、涙を流しての泣き笑いです。すると今度はその回りに集まってきた

で、不思議そうに「ないてる、ないてる、どうしたの」と指をさされたりすると、なお一層、どうにもなりません。でもこういうときは、その純粋さにふれることのできるしあわせいっぱいなのです。

けれども、子どものしたことに対しての先生の反応の一つとしての笑い、勿論先生は何気なくしたことなのでしょうが、子どもには全然逆な感じを与えていることがあるのではないかしら、と私が小さかったときの忘れられない経験から思うことがあります。

それは学校に入学したばかりのとき、菜の花のたくさん咲いている畝の中を通って野原にいったことがあります。荷物を置いてそれぞれが好きなように遊んでいるとき、私は白い花が咲いているのを見つけたので、私は得意気に大きい声で「先生、ここに白い菜の花が咲いています」と報告しました。

先生は友だち数人と共に近づいてきてその花を見て「あははは……、これは白い菜の花じゃないのよ、これは大根の花よ」とすぐ訂正されました。私は花の形がとも似ていて、珍しいものを見付けた、と有頂天になっていただけに、そのショックはとても大きかったのです。

す。花の名前が違った、ということではなく、それを見んなの前でしかも先生に笑われた、ということは、とても堪えられませんでした。

だまりこくってしまった私を見て先生は、「でもよく考えたわね、えらいわ、色は違うけどよく似ているのよ」と、あわててつけ加えられたことも覚えてはいますけれど、笑われた、という事実はそのことばで打ち消されることにはなりませんでした。

今でも畝のすみに捨てられたり、残されて咲いている大根の花を見たり、最近各所に咲いている紫色のショカツソウ(?)を見ると、すぐにそのときの光景や、自分が恥かしい思いをしてしよげたその気持ちまで思い出のです。そのとき先生の笑いは、ばかにしたり、あざけったりした笑いでなかったことは勿論なのですが、いつまでも忘れられないのです。ここが問題です。

毎日子どもに接していて、いろいろなこと柄について反応している自分、前もって予想されないことの処置が、とっさのことであつたり、忙しかったりするため、だいこんの花のようになっては大変なことだ、と思つていきます。(お茶の水女子大学附属幼稚園)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(十二)

津 守 真

形をくずすことと、形が生れること

四歳になってから新しく入った子どもとの最初のふれ合いは、三歳児の新入のときとは異なった触感がある。四月に三歳児とふれる感じは、柔らかくて、うまく気持ちがあうと、ずっと近寄ってくる。そのあとは、砂場に出たときも、砂に指をつっこんだり、砂をさらさらと落したり、単純で原始的なことから入ってゆくと、じきに自分で遊べるようになることをしばし経験する。四歳の新入児は、最初からことばで近寄ってきたり、形になった顔や字がかけると自慢してきたり、砂場に出たときも、トンネルを掘ってくれと頼んだりする。新入園児であっても、四歳の子どもは、三歳の子どもよりも一段とそれぞれ

の経験を積んでいるので、それが既製の型となって、新しい場面では、子ども自身が、自分らしさを發揮して動けるようになることがたいせつであるから、そうできるためには、既製の型が破られねばならないこともあるのだと思う。

四月十八日

新入児Iが、庭から入ってきて、ひとりでぶらぶらしてから、机の前に座り、アルファベットをかいたり、東、西など漢字をかいたりする。私の方をちらちら見ながらかいているので、私は傍に座り、紙にぐしゃぐしゃな線をかく。すると、Iは、紙の上に点をいくつもかく。私は、いい調子だと思って見ている

と、その点を線で結んで、形らしいものにして私の顔を見る。

私は今までにも、はじめてふれた子どもとの間に、同様の経験がいくつもある。形になった顔ばかりかいて、自分の感情をかめた線をかかない子どもや、字をかくけれども錯画をかかない子どもとつき合うとき、私はしばしば、錯画のようなくしゃぐしゃな線をかき、あるいは、えのぐを使うことによつて、自分の感じているところを表現できるようにする。いまここでは、その事例を引用することは省くけれども、同様の経験をもっている人も多いと思う。Iの場合には、私がぐしゃぐしゃの線をかいたら、点々を打ったけれども、それはこの子どものリズム感の表出ではなくて、点を結んで形を作るための点であった。

四月二十六日

私がいままごとのための野菜や魚を紙にかいて切つてやっていると、Iは、三角形に紙を切つて、山とかき、「これなんなんだ？」という。私はわざと分らないふりをして、「うちだろう」というと、Iは「ほら 山つてかいてあるじゃないか」とい

う。そばにいた新入児のKは、「字がよめるの？」と驚いたようにいう。Iは「うん よめるよ」と得意になって、平然と答える。そのうちに、Iは、三角形を赤くぬり、その上部に線を数本噴出させて、「火山」という。

Iが三角形をかき、山という字をかくとき、私は、教えられた形にはまって自分らしさを発揮できていないIの姿を見る。Iは字がかけることで得意である。しかし、間もなく、Iはその三角形を赤いマジックでぬり、噴火させて、「火山」という。それは、形にだけはまわっていることができないで、形を破ろうとするIの内的エネルギーのあらわれであろうか。あるいは、I自身の本来的な性質の表出であろうか。こういうのをかくようになると、早くも、形を破って内部から新たな活動が出てくる時も近いのではないかと感じられる。

六月十四日

朝、砂場で、私は、隣の組の子どもたちにひきとめられて、砂をやりはじめた。Iが砂場の向う側の保育室の出口から、私の方をむいて、「せんせー」とよぶ。はじめのうちは、こちらに

近寄ろうとしないで、何度も呼んでいる。私が「こっちにきて砂をやらなにか」と呼ぶと、次第に近寄ってきて、私に最も近いところで砂をいじりはじめる。そのうちに、Iは、水道からバケツに水をくんで、砂場の中に流しはじめた。他の子どもたちもかなりふえて、山を積んでトンネルを掘ったり、溝を掘って水を流したり、砂場の遊びはかなり活発になる。Iは、砂を積んで山のように砂がぐさぐさに積み重なった上に、砂をかためないで、水をざあざあかける。他の子が、山に固めようとしても、その間もなく、水をかける。とめどなく、水を使えう。

この日は、他の子どもも、かなり水を使っていたが、Iは、その中でも特別に、際限なくらい水を使った。とくに、砂をより上げた山の上に、水をざあざあとかけた。私は傍にいて、Iは自分自身の何かを洗い流しているかのように感じていた。水を流すことにとりつかれたかのように流す。

こういう場面は、見方によっては、しつけができていないとか、監督が行きとどいていないとか見られるかもしれない。しかし、私には、Iはそのくらい、とりつかれたかのように水を流さなければ、内部に作られた「形」は破ることができないよ

うに思われた。

もう一度、最初の場面から考えてみる。最初の場面で、子どもが字をかいて、おとなの注目をひこうとするとき、私は戸惑い、うろたえる。子どもは、私が感心して見ることを期待しているようだが、私にはそのことを取り上げてほめる気持はない。ここに書かれた字は四歳のクラスに入園したばかりのこの子どもが、自分自身の内部から作り出そうとしてできた形ではないことを直ちに見てとれるからである。幼稚園に入る前に、多分、この子どもが心をこめて描いた線を、傍にいたおとなはその価値を認めることができなくて、形をかくことを要求してきたのだらうと察する。目鼻の整った人の顔から、字へと。子どもの描くものをよく見ていれば、形になる前に子どもが自分から描く線が、どんなに子どもの微妙な感情をあらわしており、それらの線によって作られた一枚の絵が、どんなに美しいものであるかは、心を籠めて注意深く見るならば誰にでもわかる。その線の重なりを通して、その時の感情の動きを見ることができると、そこには子どもの内面から溢れた個性がある。その中から次第に人の顔のような形が作られていくのであるし、

そうしてできてくる形には、そこに用いられる線に感情があり、そこにつくられる全体の構図は、子どものものであり、意味をもっている。四歳のクラスに入園したころに、形にならない線画、いわば錯画をかいている子どもは、少なからず見るこゝとができるが、それは少しも心配なことではなく、むしろこういう時期の長い子どもの中に、後になって描画としても伸びるものが多くあることは、しばしば見るところである。それとは逆に、きまった形だけをかいて、自分自身の内面から出た線やかかない子どもを見ると、その子どもの個性や子どもらしさはどこにいつてしまったのだろうかかと心配になる。ここでIが、きちんとした字面の字をいくつもかいて、私の注目をひこうとしたとき、私にはそれがこの子どもの内面から出た形とはうけとれなかったのである。

この子どもが何かを描こうとしたときには、少くともその場面に關しては、それまで、周囲のおとなは、その子どもの内面の表現としての線や形ということを考えることをしなかったのだらうと思う。しかし、幼稚園にきたときに、この子どもが、幼稚園にいますおとなも、自分の内面からの表現を理解しないことを前提にして幼稚園生活をしようになったら、こまると思

う。自分の内面とは別に、外からの要求された形に自分を適合させるか、あるいはそれに反抗するかということにのみエネルギーを用いたのでは、幼稚園は意味がなくなってしまう。幼稚園にいますおとなは、子ども自身の内面の表現を理解してくれて、それを伸ばしてゆくに協力してくれるのだということ子どもにも、漠然とながら分ってもらいたいと思う。幼稚園において、子どもとおとながつくり上げる社会と文化は、子どもの人間としての個性を伸ばしてゆくに、すなわち、まだ形にならない時を尊重しつつ、内面から形が生み出される時のあることを確信し、それがつくられたときには共に喜び——こうして、さらに大きな眼で見れば、おとなの世界が創造的につくり上げられてゆくところに意義があるのであると思う。

Iは、きちんとした三角形の中に「山」という字をかいた後、その頂点から赤い線を噴出させ、「火山」と言った。それはI自身の表現であった。それから、Iは砂場で山の上に水をぎぎあざあ流した。一方は火で、他方は水で逆のようであるけれども、両者とも山をくすエネルギーを注いでいる点で共通である。子ども自身がやらずにはいられない、こうした内面からの行為に接するとき、それは無意味な行動ではなく、意味をもつ

たものであると思う。子どもにとっても、これはおとなから要求された行為ではなく、子ども自身の体験の意味の把握と、そこにふくまれる問題の解決を目指した行為となつていると私は考える。ここの幼稚園では、おとなから与えられた形にはまっぴりだけで十分ではなく、自分自身の、自分らしい表現をしてゆくのであることを子どもが発見したとき、それまで自分のもつていた認識を破って、新しい自分になることが必要になる。その過程では、それまで自分が身につけた形を一度こわし、破ることも必要になる。子どもはこうしたことを意識的に認識して行動しているのではないことはもちろんである。子どもは身体的行動によって認識し、反省し、行為する。しかし、その行為は全く無自覚なわけではない。その行為の中に、子ども自身の精神作業があり、それをやり終える子どもはすっきりした表情になつて、次のことをやりはじめる。

外から要求される形に適合して生きることは安全であり、それがいつか脱け出ることができない形になつてゐることがある。あるいはまた、自分がつくり出した形であっても、時が経つうちに、それが硬化して自分自身を束縛するものとなつてゐることがある。そうしたとき、本来の自分自身が創造的に動く

ようにするためには、それまでにつくられた形を何とかしなければならぬ。形から脱け出してそれを切り離して捨てるか、形を破り、こわし、くずし、あるいはまた形をとかす等々である。子どもたちが成長するときを見ても、いろいろの仕方と既に作られた形を脱出して、新しい視野を求めてゆくようである。教科書やノートを焼いてしまつたり、押入れの隅に押しこめたり、机のひき出しを全部ひっくり返して整理したり、その仕方は、場合により人によってさまざまである。そういうときには、もつたいないというような他人の評価は通用しない。自分自身の成長という大きな価値の前には、他のものは価値を失つてしまふ。

「かたち」(形)という日本語は、「かたまる」(固)、^{*}「かたい」(堅)等と同語源である。昔の人も、形ができると、それは固まつて、堅くなつてしまふ、その形をかえることは困難なことだと思つたのだろう。人間の現実世界には、形は不可欠であるけれども、ひとたび形ができると、形ができる以前の状態にもどすことが困難なことをも示していると思う。形に価値があると同様に、無形にも価値がある。すぐに形を作つてしまわないで、まして、形ができてくる前の無形の動きの状態を無視

して形を与えてしまわないで、形が生れいずるのを見守りたいと思う。人間の精神の中に形ができてくるときには、形になる前の状態のときにも、精神の張りを伴った動きがある。子どもの遊びというのは、大体がこうした精神の動きの状態をいうのであると思う。形はその中に点在してあらわれてくるものでもって、多くの部分が無形の動きである。だから製作品でも、絵でも、ごっこ遊びでも、形としてできたものは、その無形の動きの部分とあわせて見ないと、その意味をとらえることができない。保育はいつでも、形の生れ出す以前の、子どもの精神や生活を相手にしており、形を生み出す苦悩を子どもと共にしているの、精神的にも肉体的にも大へんなのだと思う。しかも、形が出てくるときには、もはや保育者の手をはなれており、子どもは自分ひとりで作ったかのような、成就感と自信をもって、外に出てゆくのである。子どもの成長は、無形の動きから形を生み出し、また、それを無形の動きにもどして新たな形を生み出すことのくり返しであると言うこともできよう。

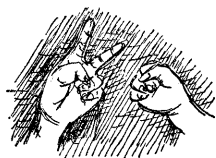
(つづく)

*(注)

漢字の「形」は、もともと「角ばった枠型」の形を描いた象形文字であるという。人を一定の枠内に押しこめ、手かせ足かせをはめること、鋳物の枠型などと同系の字であるという。

(藤堂明保・漢字語源辞典)

英語の *shape* は、もともと、切るとか木を伐るという語から来たという。



〔史料紹介〕

渡部平太夫・渡部勝之助

『桑名日記・柏崎日記』 (その四)

松川 由紀子



同年十月二十六日

医者四ツ頃参りくれ、誠にお軽く御座候。ちと細かなれどもかたき症にて至極よろしきたちにて、少しも御氣遣ひなしと申候。

同年十月二十七日

ほうそう大分水うみ致し、氣味能地ばれ参り候。只やかましく面倒にて困り入候。申出したることは如何様申ても聞分無之。今朝も三味線がほしいから、おゆきと町へ買にゆかふと申。小林に子供の三味有之。借て参り先それでたんのふ致し候。

同年十一月二十八日

真吾左の眼胎毒にて目はれ涙出て細目に

見へ候へども、痛むやらふさぎ通し。右の眼までふさぎ通し少しもお菊の手離れず、時々大おこり致し誠に困り入り申候。万一目にさわり候ては一大事也。お菊大心配昼夜一心不乱に介抱いたし候。七ツ頃泊りに出る。お六六ツ過に枕持て泊りにまいり暫くふとんあためて先へ寝せる。四ツ過手水やり抱き寝る。今晚甚寒くしがみついてねる。八ツ頃に又手水に起る。ほうそう後手水近くなり当番所にて不調法致そうかと甚心配也。

同年十一月三十日

真吾胎毒だんだんふえ、左の目のぐるり

より耳あたまへかけ岩の様になり。甚かゆがり両眼より涙出、首を苦しみもだへ、時々大だぶおこし昼夜泣声止む時なし。おきく懐へ入立通し飯を食べ候間も立て居り候位也。脇の者まで骨身をけづられるよう也。実にむごくもあり余りだだおこし候時はにくらしくもあり、かやうに困り候こと初めて也。

同年十二月二日

今朝も学校頼み不出、早く起お六きものきせ焚付る。お六お向へ行ふと申、未だ雪明け来らず行れぬと申ても聞ずに出る。お

きくいろいろにだましてもきかず、雪の中へほり出してくれと申、お六だいて入口扉の外雪の中へ仰のけに投げてくる。余り玉げ候や早速泣き出さず、夫より泣声聞ゆるけれどかまわんで戸をしめてしらぬふりして居る。その内部屋の与七雪明けに来て、これも玉げ起してやる。その音でお向の叔母さ飛で出、内へつれてゆきなざる。お向でまだ火燵出来ずつめたへから行でないと申ても聞ず、お菊近頃真吾抱きづめお六つぎどころなく、お向へ斗行たがり候も尤也。されどもどういふことか、お菊お向へやること甚嫌ひや。お向の衆はろく随分可愛がり被下候。真吾次第に悪く今日は大大疲れ出乳もろくに給はず、只かゆがりお菊額のあたり叩き通し。少しやめると叩いてくれとそこらへこすり付、私は湯へ入れやうと申、お菊は医者か湯は当分見合うと申故医者に見て貰ひよろしと申せば入れ様と申、毎日争ひ居候。医者に参りくれと申遣も、居候へども不參、今夜は別にやかましく、おきく六七月以来髪にくしの齒も入れずかおもつけず、真吾一色にかかり通し也。お

さとこそ大迷惑朝茶漬たべあと仕舞、昼飯米をかしどふやらこふやら汁も煮る。朝のこと仕舞うと直に昼になり昼のことしまふと晩になり晩も茶漬也。あとしまひ寝所迄して帰る。十一にしてよく致し毎日ほめやり候。

一八四三年一月四日

お六びんを直中結ふてやる。お民と二人にてあくれ甚やかましく困り入候。お六の唄「いかに御儼約だとふて、紙このよもじノウ。ぬれてやぶけて、おかんちよが見ゆるノウ」ろくなことは覚ひ不申。

同年三月二日

おきくとかくよろしからず、時々不機嫌になり食事一向不進困り入候。八ツ過よりおゆき参りくれ、ひな様に御膳を拵ふてくれ候。何につけても兩人の病人目もあてられぬ有様困り入候。

同年五月二日 (お禄四歳、真吾一歳)

おきく又舌大だだれに成り食事致しかね、箸を手に持涙ほとほとこぼしておる。おれは不給死んでもよけれども真吾がむこ

くてならんと申、誠に変な病にていかんとも致し難し。

同年五月二十九日

お六この頃は別してめろめろと泣き出し、今日昼過品川の見へ候時、私の側に立はだかり居候間、すわり時宜をしやれと申せば泣出し御向へ馳け行。大だだ起し候に付、品川被帰候に付直にお向へおきくも私も参り、叔母さんと三人がかりにて、ちりげへ灸を十一すえてやり、それよりおとなしくなり泣きくたぶれ昼寝いたし候。

同年十二月二十七日

お向よりお歳暮こんにやく二つ、江戸みかん十斗、お六の所へ前掛と道中双六、真吾にせんべい被下。お六大悦。

一八四四年一月一日

おろくは着物先日織り候島を着て、前髪にかせ掛け、かんざしも差し、身拵ひ出来上り候也。それより雑煮祝ふ。私六つおききく五つお六三つ真吾は一つ、守り四つ也。真吾も初て去年御遣し被下候島の着物着せる。誠に能似合ひなか／＼大男に成り候。

同年三月十五日

おろく、真吾久しぶりにて今朝骨の少き身所の沢山成る着沢山たべ大悦いたし候。着は皆鯛と平目也。

同年六月九日 (お禄五歳、真吾二歳)

大暑、目もくらやむ様にて、内に居所なし。品川より涼みながら焼跡見物、夫より祇園参詣は如何と申来る。お六おどり上りよるこぶ。早速支度して出かける。真吾も守りも行。祇園神社へ曲り角に鳥居有之、ここまでにて消へ候。それより参詣致す。調度灯燈付た処也。真吾神仏大信心者、天王の堂へ上り候処、ちやんと坐り、両手を合せ鼻の所へ当て、暫く口の内にて何か唱ひ、夫より両手を突き立つ。平に拝を致し、か様致すこと何方にても三度也。

同年七月二十日

おきく私の三尺手拭白麻也、これを真吾にふんどししめてやり候所大悦び、いろいろの身振りして見せ大笑腹筋より候。

同年十一月十五日

栗本の悴、金子の二男元服その他所々に

上下着、髪置祝ひ有之候。内でも真吾の髪

置致度とおきく春頃より願ひ居り候へども、上着一枚出来かね候。祝ひ表向不致、今日昼赤まゝたき神酒上て置申候。初職さへ致さぬもの、髪置など致さずともよろし

きと、おきくなだめ置申候。上下着の節は桑名へ参り賑々しく致し度と祈居候。

同年十二月三十日

真吾六ツ半頃まで不眠に騒ぎ居り候様出来上り持て参る。鞘は朱塗り、目貫は内の紋所也。至極能出来申候。真吾の悦びなかな筆紙に尽しがたし。昨夕より身を少しも不致、おどり上り悦び申候。

一八四五年一月十四日

真吾申にはボチャにも髪イツテ／＼と申に付、芥子大分延び候間、少しづゝつまみ、両方より合せて小さなまげに結ふてやり候。蝶々のとまり居候形にて、なかなか面白し、大悦也。大ひやうげもの、内にさへ居れば私共を色々のことを片言交りに申、顔付をいろいろにして見せ、笑はせ居り申候。

同年二月三十日

雛を例の通り部屋へ飾る。お隣の囃子方もお借り申す。子供悦び真吾人形を守りずるとて持遊ぶ。

同年五月五日 (お禄六歳、真吾三歳)

真吾外々の幟を見て余り羨敷がり候に付、一昨日か紙幟小さく拵ふてやる。大歡にて庭へ立て置く也。

同年九月十三日

日暮に真吾、お六に送られ泊りに来る。少しの間負んで庭へ出て遊せ候。ちとくもり月不見。六ツ過に真吾抱いて寝る。三ガブシ二つ三つ唄ふ。夫より昔を語れと申、猿の話半分にて眠り付申候。誠におとなしく諸人のほめ者也。先第一喚ひものねだりは決して不致、その代り持遊を持遊ぶ事は大好きなり。

同年十月二十二日

少女 (二女お綸、同年九月五日生) 誠におとなしく終日イサに入り眠り通し也。真吾近頃次第にわんぱくに成り、悪まれ口たゞき何をいふておどしても口答へなどいた

して、手にも足にもおへぬ様に成り候。三度つづ汁かけ飯四五ぜんづつかつ込喰ひぶとり、顔はイミわれそふに成り申候。香の物は余り好ズ。汁は三度づつなくては承知いたさず、奇妙なる奴なり。

同年十一月三日

真吾昨年髪置も致さず、当年はお六紐解きに付、兩人の祝ひ近々可致とて兩人の着物先頃より取かかり居候。勿論上は着は兩人とも春中拵ひ置候間下着斗也。兩人の下着お菊のものをこわして拵ふ。おろくの分は、江川の御古の由。只今拵ひ最中也。真吾の分は出来て仕廻ふ。おりんの七夜の祝ひも延し置。是も近日致す積り也。おりんの着物は御隣より御祝ひ被下。夫を拵ふて着せるとて女に先頃より拵はせ、漸々の事にて出来上りそふ也。勿論絹裏也。今日お六の帯袖鳴にて引こくり申候。一分程かかり真吾の帯は春中袖鳴にて拵ひ置候。当暮は大分の借金甚心配也。

同年十一月二十日

昨夜は小女別て咳強く出候て、時々息止る様に、お菊ろくに眠らずに居り候由、

されども格別弱り候様子も無之、お役所へ出る。四ツ半頃おろく御役所へ参り一寸来てくんなへと申す。無程行。何事と存候処お菊泣声にて小女が死にましたと申、夫はどういふことと見れば、もはや口を開き目を閉じ、如何とも可致様なし。医者薬のと騒ぎ、医者も参り救命丸も吹き込み候へども、とても埒明き不申、終にそのままに成り申候。全体生れ方弱く候や、大声出して泣くこともなし。兄弟の内一番おとなしいとお菊別て可愛がり候処、十日余も咳出、乳もろくに不飲、次第弱りの処へ痰せきあげてそのままに成り候事と被存候。不足もなき子供なれども只むごつけなく残念に存候。

同年十二月一日

真吾妙に昼の内は決て乳とも申出さず、おきくの側へも寄りつかず、終日お六とね々様事して遊ぶ。

同年十二月九日

真吾昼の内は替りなけれど、夜は大連ひあまへくさり、お菊寝付ても度々起る。乳をすさぶり通して居様と申、大着ものには

困り入候。真吾申には、おれはもはや兄チヤではなへ、おりんが死だから、おれが又ねんねに成たのだ杯と、子供同士咄て少し恥しき様子なし。何もかも承知してあまへの故、甚にくらしけれども致方なし。

同年十二月二十八日

終日障子の切張、おきく年取り用意、兩人の子供正月来るとて大楽しみ、小間物屋より歳暮に草双紙二冊貰ふ。子供の分る事作りたる故、読できかせろと申てねだり、もはや十べん斗も読む也。お菊私始め子供の正月着、別に不拵古物にて間に合せ、仕事一向無之、じゆばんのつくり位のことにて、安楽の年の暮也。

一八四六年一月四日

七ツ時泊りに出る。真吾おれも泊りに行ふと申に付、おつかさが淋しいから、よしやれと色々申て漸承知致し不行。弁当浴暮合にお六真吾負んで来る。どふしても聞んからつれて来たと申、合点の行ぬ奴にて内に居ては暮合にはお菊洗ひのけ仕廻ふのを待かねて、乳を飲む。何程旨きことやら少しも私と寝ることせず。然る所泊りの時離

れてくるのは、誠に奇妙な事也。夫よりこたついたし、寝まきあたためその内寝ころんで、昔し一つ言上ぬ内に眠り付、そのまゝに致し、五ツ過に起して小用やり抱て寝る。そのおとなしきことお菊に見せたき様也。夜中に一度夢中にて乳をさがし候間、ヲトッサと寝て居るぜやと申せば、又のり出て寝る。

同年二月二十二日

お六、栗本へ子供の寄合に呼れて行。お六、紙大分勝てきたと歎。その代り新しき紙は少しに成。しわくちや斗に成。

同年一月三十日

今日よりお六に手習初めて為致候。

同年四月七日（お祿七歳）

先日吟味致候無宿長松と申盜賊些と尋落し有之、呼出し昼過に吟味に出る。真吾中にはオトツサア役所へ行なる、おれはどろぼふの吟味に行と申、おれも行て見てイ、カへと申、姉さに見にきやれと申て出る。直に後より真吾、お六と来る。当所吟味所は御座敷の脇に有之、御座敷より障子に穴

をあけ、大勢のぞき見る事也。無程吟味初める。真吾障子の穴より見て居候。大声にて盜賊を呵り候へば、真吾何かお六と申合ふ音聞る也。相済と外の覗人と一同に逃て帰る。帰宅致候処、真吾申には、どろぼふはオトツサに叱られたけれども、笑てゐたぜと申て、一向恐しがらぬ也。いつそ拷問に致す所為見可申と存じ候。

同年五月六日（真吾四歳）

御隣にて御先祖の百年忌御法事被成候とて、お菊朝より御手伝に行。魚類の御料理のよし。兩人つれ番神参詣に行。単物と襦袢にてよろし。真吾大悦びさつさと歩行き下宿へ行と親船三艘かゝり居、御回米小舟にて運ぶ。番神の坂去年は抱て登り候処、

今度は手も引かんでくんなへと申て、二度休で上り私より却て丈夫なり。堂へ上り奥の院へ行。拜礼致す。真吾両手合せ、暫念じて時宜致し候。目をようして御くれなされましと申て、拝みやれと申聞せ置候故也。夫より堂の内額の絵など見せ、菓子壳三四人居り候間、何を買ふてやると申せば、何

でもエ、ものがエ、と申、二文どりあんこを買ふてやり、兩人して給べて仕廻ふ。夫より堂を下り、海手の景色の能所へ行。芝草の上にて休息、今日是一向参詣少し。昨日は何程の参詣人やら、どこもかもち巻の皮だらけ也。暫気色詠める。目の下にて浜の女ども仰山に裸に成り、若芽を取る舟にても取て居り、引塩にていろ／＼の岩も見

る。弁当の懸ごにふぎと鯛のあらを煮付たのと香の物入、三人にて給る。なか／＼おゐしくて不残給て仕廻候。ぶら／＼番神様の後ろ山を廻り、南の方へ出て又御堂の脇へ出る。真吾又遠くより拜んで来る。ビードロで拵ふたるポコン／＼と鳴るもの買ふてくれとねだり、無抛一つづ／＼買てやる。八文づ／＼也。七ツ前に帰る。

同年六月八日

祇園祭祀にて十四日まで也。お六申には御陣屋にかたびら持ぬ者は、おれ斗栗本のお雪さおいせきなんぞは、三枚も四枚も持てゐなる杯と申て、そろ／＼ねだり初り困り入申候。……例年の通り祇園にて今晚、陣内の若手ども、打揚大分こしらひ三十本

余も揚候よし也。真吾尼寺へちれて行ない
くくと七ツ頃よりねだり、日暮つてつ
行。

同年六月十七日

真吾七夕の船持ふ所へ行。当七夕より真
吾も交り錢を五文十文子供集めに来る也。
真吾大悦び、おれも七夕祭に交つた。もう
大きくなつたからだねへと申に付、それ
も乳を呑むのはどふ云ことだと申せば、エ
オトツサの馬鹿めがと申し、顔を赤くす
る也。

同年八月六日

暮合に真吾申には、余所の人は皆釣に行
きなると申、ワットサはなぜ行きならん
だるふと申、大笑也。此頃は色々不審尋ね
る也。今日は御節句だに、なぜ雨が降るだ
ろふ。花は木にどふしてなるのだろふ、お
とつさはどふしておつかないのだろふ、な
どと申て妙な事申て笑せ居候。

同年八月二十三日

真吾シボ取にちれてゑきないと申てねだ
りぬき、無撓兩人つれてぶら／＼出かけ、
中浜山昨日の午前の山まで行。小さなのを

二三十も取る。真吾大悦び、みんなおれの
様なのだと申て、小ビクに入て悦ぶ。お六
も大分取候。真吾松林の中へ入り、うす暗
くなり気味悪くなり候哉、もふ帰りたいと
申、そろ／＼帰りにする。山通六ヶ敷所は
お六負んでやり、帰り道も大分負ふ。七ツ
前に帰り候。真吾は大分こりこり致し候様
子也。昔取りの事誠に面白へけれども、遠
くてこわいと申大分の坂斗り越し候故也。

同年九月二十日

真吾比頃は誠に大丈夫、大食致終日能遊
び、喰物ねだり致し候事絶て無之。只悪た
れ口は大分利出し、昨夜些小便シビリ。今
朝おきくに呵られ候処、ソナラモツトた
れてやるぞと申し、誠に平気なもの也。女
子と違ひ、めつたに泣事無之。泣ても長泣
はず、折々ヒヨウゲロ利、笑わせ申候。
此頃もおかつさ、チンボコの隣はキン玉、
キン玉の隣は尻の穴だねへ、どうして尻に
穴が有だろふ杯と申大笑仕り候。右に類し
候事折々申出候也。

同年十一月十五日

四ツ半頃頼帰り候。真吾待兼居り、直に

髪結てやり、お六にお弓の兄八十七迎へに
やり、来ると直に真吾上下着せ、八十七に
負せて大窪諏訪宮へ参詣致させ候。お六は
刀持に行也。道悪しく大難儀の由也。早朝
よりおゆきおきよ手伝ひながら参りくれ、
叔母さ、お民も同様也。真吾の帰らぬ内に
子供客の迎へに遣し、追々集り候、……子
供ら大悦び騒ぐとも／＼物音聞へず、真吾
春以来の楽しみ、その悦び大方ならず、紋
付着て上下大小指し候処、中／＼大男に相
成、この所桑名の御祖父様お婆様に見せ
度とて、おきくつく／＼詠め居申候。子供
八ツ半頃迄に不残帰り候。夫より晩の家の
騒ぎ也。短日故皆々立騒ぎ通し也。……お
六終日使に所々へ飛びゆかされ。疲れ候故
五ツ過にこたつへ入眠る。真吾はおれがお
祝ひだから、ねむたくなへと申して、お菊
の帰る迄起て居候。勿論やかましく申事は
無之、只ひようげ居り、唄ふやら踊りの真
似いたし、或は紙にて何か折て遊ぶ。自分
の子をはめるは大馬鹿ものなれども、真吾
は極おとなしき奴じや迎、叔母さお菊など
大はめ者也。

同年十二月三日

お六漸のことで、いろはと一二三を上げ今日より書初をならふ。手習ごくきらひ、糸を引たがり候へども、綿もなし……。

同年十二月二十八日

真吾近頃は何でも不審に相成、様々の事を尋ね候。昨夜も寝て居り、海の鳴音を聞付て申には、海は誰が掘て水を入れたんだへ、本から有るのさ、ソフカヘソレデモ誰か掘んけりや深ふならん、町の者でも鍬で掘たるふか杯と申す。又申すには、手のひらは誰が付てくれたんだへ、本から付てあるのさ、フム……右の様な事毎日／＼クドク聞申候。

一八四七年二月二十二日

お六小僧（三男行三郎、同年一月十九日生）を抱くとてせり合ふには困り入候。真吾日に何十べんとなく、小僧の頬べたへ自分の頬を付てみる。お六負で居り候ても、無理やりせいのびして付やふとする。お六させまへとする。お六でも誰でも抱て居ると、おれに抱しなへと申て取揚、能寝て居るを起して困り入申候。

同年三月七日

おきく昨夕より些とよろしけれど、気分不引立、べったり寝て居り、食を給ると吐気来り困り入候。どふかこふか洗ひのけ致し、お六は小僧起ると負び通して居る。……小僧ちと笑ひ申候。

同年四月六日（お祿八歳）

小僧大分太り頬べただれ下り、色黒く目くる／＼能笑ふ。

同年六月二日（真吾五歳）

子供らおきくを馬鹿に致し困り入候。小僧次第に大ぶとり、この頃は暮合に一度貰ひ乳致し、昼の内両三度摺り粉為給、夜分はお菊の乳にて沢山有之候。

同年八月三日

小僧大体真裸にて毎朝私の懐へ入り、隣へ行と叔母さ連公ばいっすり合て取り上げ、懐へ入て朝飯迄はお隣で遊んで来る。起ると直にお六に負われ候事は邂逅の事なり。

同年八月七日

吟味最中大分の地震にて、白洲へ五六人

出居候者共、大狼狽不残外へ飛び出し申候。おきくと真吾座敷に居り庭へ飛び出し候よし。真吾未だ地震と申は訳わからず、何か形のあるものと心得居り候哉、地震と申せば、外へ出て見る。おや地震は何処へ

行て仕廻ふたるふ、地震が見たくてならんと申候由、今日は上天気冷氣にて地震杯思付も無之。

同年十月一日

真吾、小僧つれて洗湯へ行、熱き湯大好き、此頃跡追ひ致し、かくれて役所へ出申候。

同年十一月十日

唐詩選五言絶句空説を教へて遣し候。真吾もはや七ツ斗覚、毎朝夜大声にて唄ふ。可也に覚もよさそふに成候。お六、小僧負ふて遊びに来る。おろして火たつに抱て当り、大元氣、六ツ過に負ふて帰り候。真吾無程寝せる。詩三ツ四ツ唄ふ内眠つては仕廻ふ。

同年十二月三十一日

年取用意も出来上り、九ツ時取り可申と存候処、おきく行三郎抱て、足元不見、真

吾の持遊箱の蓋を踏み破り、真吾大おこり、只今元の通り拵ふてくれと申て、だだ起す。色々だましてもすかしても不聞、おきくに頭一つ叩かれ泣き出し、年も取らん、べいも着んで多々杯とちくね出し、御隣より聞付、運公晩に元の通り拵ふてやるとだまされ、漸きげん直し、九ツ過に家内五人打揃ふて、無滞年を取り申候。

一八四八年一月一日

お六次第に正月遊び面白うなり、内に寄りつかず。

同年一月四日

九ツより助番に出る。行三つれて出暫守り致、お六迎へに来てつれて行、七ツ時交代帰宅、行三運公につれられて櫻間へ遊びに行候よし。帰り候処也。行三郎諸人可愛がり、所々より借に参り誰の所へでも行。人に見せぬ故持遊に中／＼面白き事と見へ候。這ひかゝり候へども、本当に這ひ不申、食べ物は何でも能く給べ、此頃は夜分寝る時、一度摺り粉為吞、その外は乳と餅茶漬等にて少しも小言不申、最早大分育て能く成り候。乳も些とつゝ増て参り候間、

大体乳斗りにも宜しく候得ども、生れ落ちより大喰致候故、瘦せてはならぬ迎色々世話致し、誠に肥ひ太り気味よき奴也。

同年一月十九日(行三郎一歳)

七ツ前に小僧つれて洗湯へ行、小僧誕生日おきく命拾ひ候日に付、赤まゝ焼き叔母さお呼び申候。

同年一月二十六日

今朝よりお座敷にも素読有之、一寸出て来る。真吾も一同に行、暫見て来る。五ツ前に交代帰宅、真吾おれも書物読みたいと申、夫より大学教へて遣す。去年より空読は出来候へども、字ツキ甚六ヶ敷、乍去大悦び度々出て習ふ。真吾書物習ふに付、お六も羨敷成り、百人一首を出し習ふ。是も空読は大分出来候故、忽覚ひ申候。

同年一月二十九日

岡雄左衛門殿屋過に被見に悴鶴尾、渡部代蔵兩人とも素読を頼れ、承知致す。真吾大悦び、鶴さもおれも精出して習ふと申。日々三度夜も出てふくし候。当分珍敷と被存候。

同年二月十八日

お六去年来守りに斗りかゝり、手習も見台置候処、此節幸長日に成り、小僧昼寝沢山致し候間、今日より手習ひ初めさせ、真吾もお六の跡にて、いろは習ひ始め、中々世話のやけたる事也。大分暖になり、小僧サツサと這ひ出し、大まめ奴、真吾は病身にて左様の事無之、大相違のことに御座候。

（山口女子大学）

本誌定価改訂のお知らせ

諸経費値上りのため、誠に不本意でございますが、本誌の定価を左記の通り改訂させていただきます。
なにとぞご諒承下さいますようお願いいたします。

記

「幼児の教育」 一部定価二二〇円

(昭和五十三年一月号より)

以上

昭和五十二年十二月

株式会社フレール館

読者各位

幼児の教育 第七十六卷 総目録

◆一号

- 時間について 柳瀬 睦男
 人でつづる保育史―豊田英雄― 安 省三
 子どもとの出会い―始原の回復と時の再
 生― 本田 和子
 米国の幼児教育における五つの実験(五)
 おばさんの子どものころ 6 棚の上
 柴岡 治子
 保育者養成のための幼児観察VI
 立川多恵子
 保育の体験と思索―子どもの世界の探究
 (三) 津守 真
 図書紹介
 写真・少女(その三) 西本 真
 ミミズのゆくえ 河井 祥子
 倉橋賞受賞論文 幼児の心身発達と環境
 (後) 奥平 洋子

◆二号

- 星 永
 保育時間を延長すべきか 勝部 真長
 人でつづる保育史―岡 政―
 氷の季節によせて 秋山 和夫
 冬の子ども 川崎 千東
 冬の子ども 岡田 恵子
 冬の子ども 白鳥美智子
 冬の子ども 加藤 幸子
 米国の幼児教育における五つの実験(六)
 大戸美也子
 保育の中の小さなこと大切なこと⑨
 守永 英子
 ふりかえって幼児期の教育を考える
 浜田 駒子
 写真・作る 西本 真
 過疎地の幼児教育について―山口県への
 き地保育所を中心に― 松川由紀子
 保育の体験と思索―子どもの世界の探究

◆三号

- 津守 真
 (四) 図書紹介
 おばさんの子どものころ 7 おまんじ
 ゆう 柴岡 治子
 子どもが変わったということ山下 俊郎
 人でつづる保育史―アルウィン・ベラー― 松村 康平
 米国の幼児教育における五つの実験(七)
 大戸美也子
 保育の中の小さなこと大切なこと⑩
 守永 英子
 私の保育 動物雑居の幼稚園東 亮子
 浅山英一先生の「児童園芸学」の講義を
 書いて 皆川美恵子
 写真・パートナー 西本 真
 ふれあいを求めて―高槻市立幼稚園養護
 補助教員の実践報告―
 保育の体験と思索―子どもの世界の探究
 (五) 津守 真
 十年目に思う「こんなこと」「あんなこ
 と」 まとめ・編集部

おばさんの子どものころ 8 コスモス

柴岡 治子

◆四号

幼児教育第二世紀にむかって―幼児教育の課題―

南 信子

人でつづる保育史―及川平治―

久保 いと

ひとりひとりの子どもを見つめて①

赤羽美代子

私の保育

岩淵 静江

子どもの心もちと私

豊田 一秀

米国の幼児教育における五つの実験(八)

大戸美也子

写真・サッカー

西本 真

公開座談会―谷川俊太郎氏を囲んで―

海外文献紹介―国際児童教育連盟とその機関誌について―

遊具についての一考察

浅野 俊道

おばさんの子どものころ 9 みどり色

の線 柴岡 治子

お茶の水女子大学文教育学部附属幼稚園

創立百周年式典を行なう 堀合 文子

◆五号

人間性と人間の生活に根をおろした幼児教育を

小さな幼稚園

高橋さやか

講演 内なる自然との調和

清水美智子

閨秀画家 武村耕靄女史

勝部 真長

ひとりひとりの子どもを見つめて②

赤羽美代子

私の保育

太田 茂行

子どもとの出会い―幻視の世界―

本田 和子

チイ子

上田 貞美

海外文献紹介

保育の体験と思索―子どもの世界の探究

―(六)― 津守 真

おばさんの子どものころ 10 でんき

柴岡 治子

◆六号

幼児教育第二世紀にむかって鈴木 とく

水戸藩と保母第一号 豊田英雄子

渡辺 宏

米国の幼児教育における五つの実験(九)

大戸美也子

ひとりひとりの子どもをみつめて③

赤羽美代子

若き保育者を育てるために 石割 陽子

ハイメンと生き物たち 水藤 昭子

おばさんの子どものころ 11 光るステ

ッキ 柴岡 治子

海外文献紹介

保育の体験と思索―子どもの世界の探究

―(七)― 津守 真

対談 子どもの中からうたを渡辺 茂

きき手・村田 修子

◆七号

幼児教育第二世紀にむかって黒田 成子

星 周郷 博

星をみる会 波田野佳代子

星 森下 博三

ひとりひとりの子どもを見つめて④

赤羽美代子

米国の幼児教育における五つの実験(十)

大戸美也子

私の保育

写真・カンカラ

星について

わたしの星

星ふる高原

海外文献紹介

図書紹介

保育の体験と思索―子どもの世界の探究

―(八)

おばさんの子どものころ

原

柴岡 治子

◆八号

童心恐るべし

保育における中心、脱中心―画一的な保育の彼方へ―

育の彼方へ―

野口 明

私の幼児教育論(その出発点)

本田 和子

夏休みと本

佐藤 文子
村石 京子

太田 次郎

ほたて貝の想い出

ひとりひとりの子どもを見つめて⑤

赤羽美代子

米国の幼児教育における五つの実験(十)

―(一)

児童園芸学

夏休みと本

写真・"てれちやうなあ"

私の保育

海外文献紹介

保育の体験と思索―子どもの世界の探究

―(九)

原

津守 真

◆九号

幼児教育第二世紀を迎えて

私の幼児教育論(その二)―子どもをと

りまく生活環境―

秋ぐちの幼稚園の点と線

ひとりひとりの子どもを見つめて⑥

赤羽美代子

若い保育者へ―K先生への手紙―

伊東 功

私の保育

米国の幼児教育における五つの実験(十)

二)

人でつづる保育史―飯島半十郎の生涯と

思想―(その二)

九月に想う

写真・猿山?

海外文献紹介

保育の体験と思索―子どもの世界の探究

―(十)

史料紹介 『桑名日記・柏崎日記(その

一)

◆十号

松川由紀子

幼児教育第二世紀の曙に望むもの

私の幼児教育論(その三)―家庭と幼稚園―

人でつづる保育史―飯島半十郎の生涯と

思想―(その二)

若い保育者から―保育者二年生のつづき―

き―

根岸 草笛

佐藤 文子
小林 恵子
森 道子

万年ピッチャーの配慮

村田 修子

米国の幼児教育における五つの実験(十

三)

大戸美也子

アメリカにおけるオーブン・エデュケイ

ション(その一)

白井 堯子

写真・「あつ、いったあ」

西本 真

図書紹介

岡田 正章

倉橋賞受賞論文 運動会を契機とした遊

びの変化

丸山くみ子・他

保育の体験と思索―子どもの世界の探究

―(十一)

津守 真

史料紹介 『桑名日記・柏崎日記』(その

二)

松川由紀子

◆十一号

幼児教育第二世紀を迎えて

河辺 泉

人でつづる保育史―飯島半十郎の生涯と

思想―(その三)

小林 恵子

私の保育

宮下美智代

ひとりひとりの子どもを見つめて⑦

赤羽美代子

米国の幼児教育における五つの実験(十

四)

大戸美也子

アメリカにおけるオーブン・エデュケイ

ション(その二)

白井 堯子

倉橋賞受賞論文 乳幼児の遊びの研究

へい・かべ

村田 修子

児童園芸学 秋の宝石

和多美知子

皆川美恵子

図書紹介

津守 真

明日の保育を考える―親と子と保育者と

の出会いをめぐる―

小泉 庸子

史料紹介 『桑名日記・柏崎日記』(その

三)

松川由紀子

◆十二号

幼児教育第二世紀にむかって―三つの提

言―

山村 きよ

私の幼児教育論(その四)―幼児の集団

と大人―

佐藤 文子

ルーベと星砂

酒井 恒

メガネ

入江 礼子

メガネのもつ力

今泉 吉晴

魔法のメガネ

八木田宜子

子どもとメガネ雑感

金井 崇

ひとりひとりの子どもを見つめて⑧

赤羽美代子

米国の幼児教育における五つの実験(十

五)

大戸美也子

アメリカにおけるオーブン・エデュケイ

ション(その三)

白井 堯子

笑い

村田 修子

保育の体験と思索―子どもの世界の探究

―(十二)

津守 真

史料紹介 『桑名日記・柏崎日記』(その

四)

松川由紀子

第七十六巻総目録



一年の終り、十二月三十一日の夜には「時」のおばあさんが来るといふはなしを小さいときからきいたような記憶がある。「時」のおばあさんは、柱時計の下で、編物をしながら、子どもたちにおはなしをしてくれる。そのおばあさんは、めがねをかけているものと私は信じこんできた。めがねは、十二か月の時を刻んで、経験と知恵をつんできたことの象徴のような気がする。めがねを通して見るおばあさんの目は、優しい中にも威厳があり、若い時の生命の力だけでなく、苦労に刻まれた人間の精神の力を思わせる。子どもはめがねが好きである。小さい子が、めがねをかけた人の顔をじっとみつめていることもあるし、そのめがねをとうろうとして手を伸ばすこともある。家庭でも幼稚園でも、紙を切つてめがねを作ると、きつと子どもたちは興味をもつ。めがねには、子どもの関心を魅く何ものかがあるらしい。素顔のままの目で

はなくて、何か人工の力を加えた目。拡大鏡や、顕微鏡、望遠鏡も、子どもが目輝やかせて興味をもつ道具のひとつである。これも、素顔の目では見ることのできないものを、人工の力を加えることによって見させるものである。「時」のおばあさんの目は、めがねをかけているのがふさわしいようである。それは子どもたちがまた持つていない、文化と知恵の集積の象徴でもある。めがねには、子どもを魅きつける力と、遠ざける力があるようで、いろいろ考えると、面白いことがたくさんあるだろう。

日本の幼稚園も百一年目を過ぎたが、幼稚園の歴史の中で積み重ねられてきた先人の努力と知恵は、果して生かされているだろうか。幼稚園は子どものものとして育っているだろうか。幼稚園を幼児のものとしようと苦闘してきた歴史の上になさやかな努力を重ねてゆくことを、幼稚園第二世紀の課題としたい。(津守)

幼児の教育 第七十六卷第十二号

十二月号 © 定価二〇〇円

昭和五十二年十一月二十五日 印刷
昭和五十二年十二月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

★美しいケースが舞台として使えます。

幼児かみしばい

ケースのおもての絵でジグソーパズルができます。
ジグソーパズルは遊びのなかで、お子さまの思考力を自然に高めます。

舞台兼用美麗ケース入り
B5変型判・本文12枚・各500円

しらゆきひめ

文・稗田宰子 絵・手塚プロダクション



ブレーメンのおんがくたい

文・三越左千夫 絵・おほ・まこと



こぶとり

文・横 皓志 絵・梅田俊作



おおかみと七匹のこやぎ

文・筒井敬介 絵・福田庄助



ヘンゼルとグレーテル

文・伊藤海彦 絵・鈴木琢磨

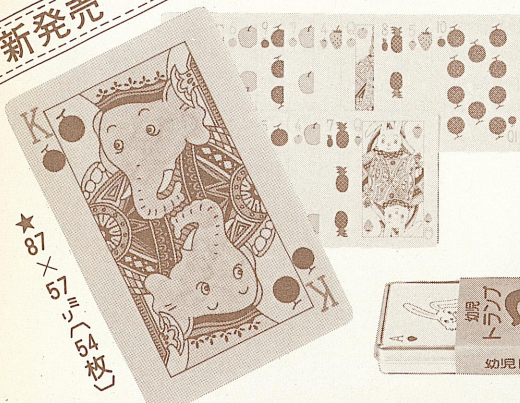


おむすびころりん

文・横 皓志 絵・若菜 珪



新発売



かわいいカードで楽しさいっぱい。

幼児トランプ

★プラスチックケース入り 250円

動物と果物のマークをくみあわせた、楽しい幼児用トランプです。トランプ遊びのほかに、集合遊び、数遊び等の教材としても使えます。

絵・尾崎真吾

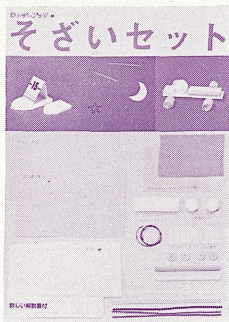
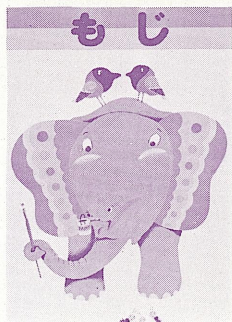
フレーベル館

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課
TEL 東京 (03) 292-7781(代)にお問い合わせください。

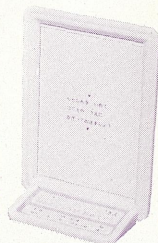
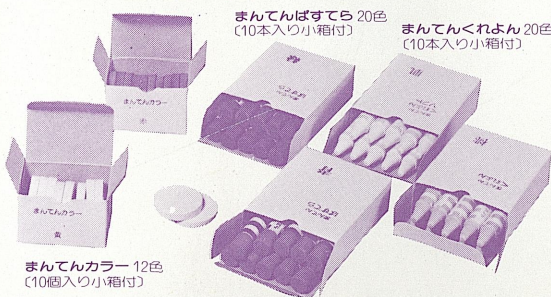
53年度新学期用品

より豊富に種類をとり揃えました。

+++更に内容を充実しました。+++



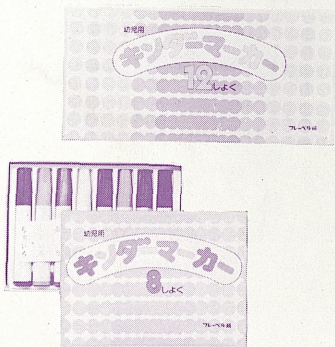
クレヨン・ソフトクレヨン
パステラ・まんてんカラー
の補充用です。



まんてんくれよんソフト 16色
〔10本入り小箱付〕

まんてんカラー 12色
〔10個入り小箱付〕

キンダーポスターカラー



フレーベル館の保育教材は、幼児が楽しみながら、
しかも使いやすさを十分考慮して作られています。

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 ☎(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

創業70年・キンダーブック創刊50年 フレーベル館